

原遺跡第7次調査概要報告書

例　　言

- 1 本書は、宮城県岩沼市南長谷字北上に所在する原遺跡の第7次調査概要報告書である。
- 2 本調査は、原遺跡の範囲・内容確認のために実施したものである。
- 3 現地調査は、岩沼市教育委員会生涯学習課が令和4年(2022)8月4日～12月9日にかけて実施した。調査面積は392m²である。
- 4 調査に際しては地権者である大泉正一氏、耕作者である鈴木栄一氏、農事組合法人原生産組合及び近隣住民の方々からご理解・ご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。
- 5 出土品整理及び報告書作成については、令和4年(2022)12月10日から2月20日にかけて、岩沼市文化財整理室にて行なった。
- 6 本書の構造ならびにトレンチ番号は、現地調査時に付したものを使用した。また今次調査で検出構造の略号は以下のとおりである。

S A : 柱列跡、S B : 掘立柱建物跡、S D : 構跡、S I : 竪穴建物跡、S K : 土坑、
P : 柱穴跡

- 7 本書の執筆・編集は、生涯学習課内の協議の上、川又が執筆・編集した。
- 8 発掘調査の実施、及び整理作業にあたっては次の諸氏・機関よりご協力・ご教示を賜った。記して感謝申し上げます(五十音順・敬称略)。

安達 誠仁、阿部 明彦、生田 和宏、石本 弘、及川 健作、近江 俊秀、太田 昭夫、大橋 泰夫、菅野 智則、斎野 裕彦、佐久間 光平、佐藤 源之、佐藤 敏幸、佐藤 憲幸、白崎 恵介、白鳥 良一、鈴木 朋子、高橋 栄一、武田 裕光、千葉 宗久、傳田 恵隆、長島 栄一、永田 英明、新妻 茂雄、丹羽 茂、初鹿野 博之、廣谷 和也、藤木 海、古田 和誠、村上 裕次、村田 晃一、矢内 雅之、吉野 武

文化庁、宮城県教育庁文化財課、多賀城跡調査研究所、原遺跡調査検討委員会
東北大学東北アジア研究センター

- 9 本報告書における遺構・遺構挿図等の指示は以下のとおりである。
 - (1) 遺構の用語及び略称については、文化庁文化財部記念物課『発掘調査のてびき』に準拠した。
 - (2) 遺構実測図の水糸高は海拔を示す。
 - (3) 縮尺は図に示すとおりである。
 - (4) 土層及び土器の色調は「新版標準土色帖」(小川・竹原:1973)に拠る。
- 10 第7次調査の成果については、令和4年度宮城県遺跡調査成果発表会要旨、ならびに第49回古代城柵官衙検討会資料集で内容の一部を報告しているが、これと本書の内容が異なる場合は本書が優先する。
- 11 発掘調査の記録や整理した資料、出土遺物は岩沼市教育委員会が保管している。

目 次

例 言

調査要項

第Ⅰ章	調査に至る経緯・経過と調査方法	1
1.	調査に至る経緯と経過	1
2.	調査方法	2
第Ⅱ章	遺跡の位置と環境	3
1.	地理的環境	3
2.	歴史的環境	4
第Ⅲ章	調査成果	7
1.	基本層序	7
2.	発見した遺構と遺物	9
a.	掘立柱建物跡	10
b.	柱列跡	14
c.	堅穴建物跡	17
d.	溝跡	24
e.	その他の遺構と出土遺物	29
f.	遺構外出土遺物	31
第Ⅳ章	考察	32
1.	遺物について	32
2.	遺構の変遷について	33
第Ⅴ章	総括	35
	引用参考文献	36

写真図版

挿図目次

第1図 原遺跡第7次調査地の位置	1	第16図 SI22001 内遺構土層断面図	19
第2図 第7次調査 調査区位置図	2	第17図 SI22001(2)	21
第3図 岩沼市域の地形分類	3	第18図 SI22001 出土遺物1	22
第4図 岩沼市域の遺跡分布図	5	第19図 SI22001 出土遺物2	23
第5図 第7次調査基本層序	7	第20図 I区大溝	24
第6図 I区平面図	8	第21図 I区 SD22002 土層断面図	25
第7図 II区平面図	9	第22図 II区 大溝・溝跡・近世大型土坑	25
第8図 SB22011・22019	10	第23図 II区 SD22012 土層断面図	25
第9図 SB22011・22019 土層断面図	12	第24図 SD22002・22012 出土遺物	27
第10図 SB22011・22019 出土遺物	14	第25図 大溝区合成図	28
第11図 SB22018・22022	15	第26図 SD22014 土層断面図	29
第12図 SB22018・22020 土層断面図	15	第27図 その他の遺構出土遺物	30
第13図 SA22020 土層断面図	16	第28図 遺構外出土遺物	31
第14図 SA22020 出土遺物	16	第29図 第7次調査出土の主要な土器	32
第15図 SI22001(1)	18	第30図 原遺跡内で発見された 主要遺構と区画溝	33

写真図版目次

写真図版 1	37	写真図版 8	44
写真図版 2	38	写真図版 9	45
写真図版 3	39	写真図版 10	46
写真図版 4	40	写真図版 11	47
写真図版 5	41	写真図版 12	48
写真図版 6	42	写真図版 13	49
写真図版 7	43	写真図版 14	50

表目次

第1表 岩沼市域の遺跡一覧表	5
第2表 据立柱建物跡属性表	16
第3表 竪穴建物跡属性表	24
第4表 溝跡属性表	29

【調査要項】

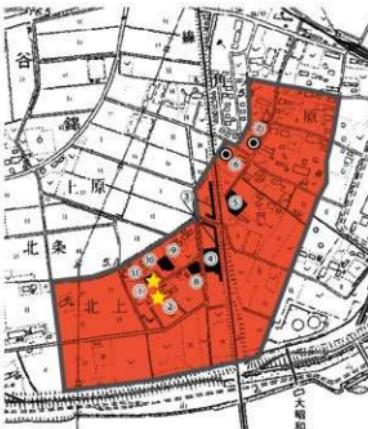
- 所在地 宮城県岩沼市南長谷字北上 地内
- 調査原因 遺跡範囲・内容確認
- 調査主体 岩沼市教育委員会
- 調査期間 令和4年8月4日～12月9日
- 調査面積 392 m²
- 調査指導 文化庁、宮城県教育委員会、原遺跡調査検討委員会（委員長：白鳥 良一）
- 調査担当 岩沼市教育委員会生涯学習課（川又 隆央、熊谷 篤、黒岩 凌太）
- 現地調査参加者 塩谷 信幸、斎藤 新彌、渡辺 幹雄
明石 良一、浅川 俊夫、金子 利雄、古積 恵美子、佐藤 守、宍戸 功二、
平 信弘、玉山 俊彦、新田 豊記、早坂 忠正、八島 健治
- 整理作業専従者 菅原 健

第Ⅰ章 調査に至る経緯・経過と調査方法

1. 調査に至る経緯と経過

原遺跡の発掘調査は、平成28年度の圃場整備事業に伴う第1次調査（第1図③）において、古墳時代中期から平安時代にかけての遺構・遺物が多数発見されたことに端を発する。この調査は、排水路敷設に伴う調査のために調査区幅は約2mと狭いながら、一辺が1mほどで方形の掘方を有する柱穴群や、美濃地方で生産されたと考えられる須恵器円面鏡が発見されたことから、これまで場所の特定が課題となっていた「玉前駅家」、あるいは「玉前刻（閑）」に関する遺跡である可能性が浮上した。この成果を受けて岩沼市では、遺構・遺物の広がりをさらに把握することを目的として、柱穴群が確認された地点の西側水田において平成29年度に第2次調査を実施し、遺構群が西側へも展開することを明らかにした。しかしながら、第2次調査は調査目的を範囲確認に主眼を置いていたことからトレンチ調査を選択しており、発見した遺構が時期別にどのような空間を形成していたのか、という点は明らかにできなかった。平成30年度に実施した第3次調査（第1図④）は、前年度調査の課題解明に取り組むために調査区を拡大するかたちで実施した。その結果、8世紀前半から後半の時期には建物の主軸がほぼ真北方向となる桁行10間、梁行3間の大型掘立柱建物跡が存在していることが判明した。この建物は同位置で建て替えが行われ、周辺にはそれぞれの主軸に近似する小規模な建物も認められている。なお、掘立柱建物群に先行する材木塀と大溝も発見されているが、両者の機能時期や規模、性格の詳細については今後の課題となった。令和元年度の第4次調査（第1図⑤）はJR常磐線東側での様相を把握することを目的として実施し、8世紀代と9世紀前半以降の2時期の遺構面が存在することが確認された。この2時期の遺構面ではともに掘立柱建物跡が認められており、第3次調査で発見された建物群が8世紀末葉以降に北東側へ位置を移す可能性が考えられた。令和2年度の第5次調査（第1図⑧・⑨）では、8世紀代につくられたとみられる真北方位を主軸とする掘立柱建物が発見されたほか、7世紀後半段階に東海地方で生産された須恵器を含む竪穴建物跡も見つかり、市内に点在する横穴墓群からも同様の遺物が発見されていることから、これら横穴墓群の被葬者たちの生活母体が当遺跡地である可能性が高まった。令和3年度の第6次調査では、7世紀後半につくられた一辺が約10mほどの大型竪穴建物や、8世紀代につくられたとみられる真北方位から東側へ直角に屈曲する大溝を発見しているが、大溝主軸方位の企画性が極めて高いことから、何らかの施設を取り囲む区画の北西コーナーであると考えられた。

国庫補助事業5年目となる今年度の調査は、第6次調査II区の南側で実施することになった。この



第1図 原遺跡第7次調査地の位置

調査は第6次調査で発見した区画施設の範囲と、内部の様相を把握することを目的とした。幸いにして地権者である大泉正一氏より調査へのご快諾が頂けたことから、調査地となる水田等(第1図①・②)の休耕補償を含めた土地賃借について協議を重ねた。その後、令和4年7月1日付で大泉氏と「土地賃借契約」を締結し、調査機材等の準備を行った。

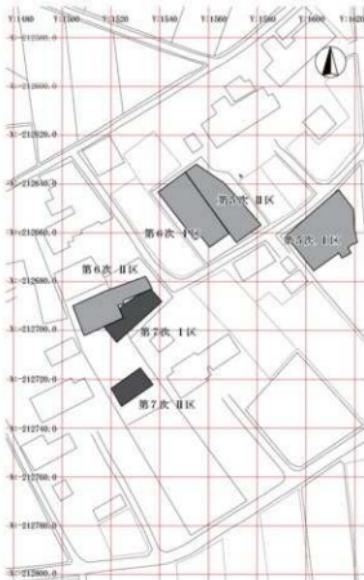
現地調査は令和4年8月4日より着手した。II区から開始した重機による表土掘削に並行して造構精査に取り掛かり、掘立柱建物や堅穴建物、そして前年度確認した大溝の延長部分を中心とした造構の検出、及び重複関係の把握に重点を置いた調査を行った。調査の成果が概ねまとまった11月9日に報道機関に向けた現地公開を行い、11月12日前半に地域住民、12日午後から翌13日には一般市民を対象とした現地説明会を実施し、170名の参加を得た。その後、造構図面の作成などの作業を行い、12月9日に機材等を搬出、重機による埋め戻しを12月10日から12月20日にかけて実施した。なお、調査では随時デジタル一眼レフカメラを用いて写真撮影を行っているが、ドローンを用いた空撮を5回実施している。

調査中には宮城県教育庁文化財課、多賀城跡調査研究所などをはじめとする方々が来跡し、様々な助言をいただいた。また原遺跡の調査計画・調査方針を審議・承認するための「原遺跡調査検討委員会」を令和4年10月24日に開催し、現地視察を実施した。さらに10月28日には文化庁主任文化財調査官の現地指導を受けるとともに、今後の調査の進め方などについて協議を行った。

2. 調査方法

第7次調査の目的は、前述のとおり第6次調査で確認された大溝からなる区画施設の把握と、内部の様相を把握することである。このため、検出した造構についての掘り下げはごく限定的なものにとどめている。

調査はまず、重機を用いて I 区・II 区とともに基本土層 IV 層上面までを掘削し、その後に遺構確認面としている IV 層、あるいは V 層で精査を実施した。確認した遺構のうち、柱穴については一段下げる実施して柱痕跡の有無を確認したほか、掘立柱建物や柱列を構成することが確実なものについては部分的に断ち割りを行っている。堅穴建物については一部を掘り下げて調査している。遺構の平面測量に際しては、これまでの調査成果との整合性をはかるために岩沼市が設置した 2 級基準点、及び圃場整備事業の際に設置された 3 級基準点を使用した。なお、岩沼市設置の基準点数値については、国土地理院が web 上で公開している「平成 23 年（2011 年）東北地方太平洋沖地震」による地殻変動を補正するパラメーターファイルを用いて補正を行った数値である。



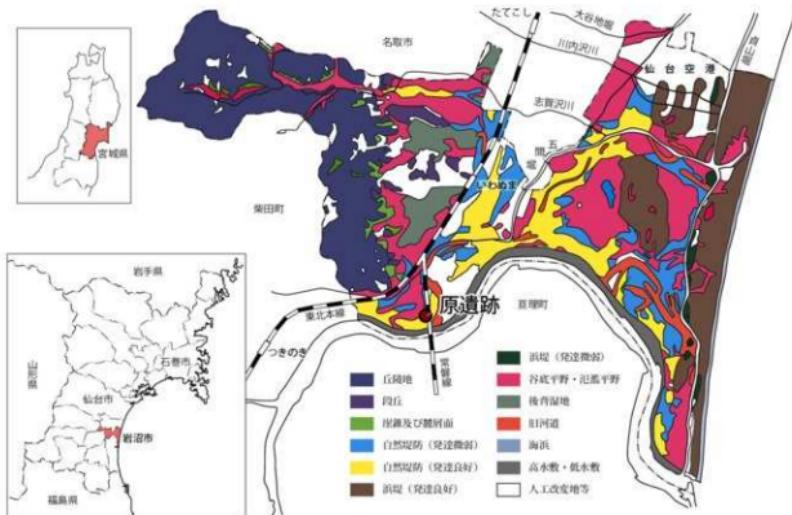
第2図 第7次調査調査区位置図

第II章 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

岩沼市は宮城県南東部に位置し、東は太平洋に臨み、北は名取市、南は阿武隈川を隔てて亘理町、西は奥羽山脈から派生した陸前丘陵に含まれる高館丘陵で村田町・柴田町と市域を接する。市域の南端を東流する阿武隈川は、福島県と栃木県の境に位置する旭岳に端を発し、福島県内を北流して宮城県へと至る大河川であり、その全長は国内6位の239km、流域面積は5,400 km²を測る。本市は、この阿武隈川が太平洋に注ぐ河口部北岸に位置している。また本市は古代では東山道と、東海道から延びる連絡路が合する地点であったと想定されるが、現在でも国道4号と同6号、JR東北本線と同常磐線の合流地点となっており、交通要衝の地として知られている。

市域を地質学的に大別すると、西側の山地と東側の広大な沖積地に分けられる。山地は南北に伸びる岩沼西部丘陵（標高100～300m）と高館丘陵（標高200～300m）、これらの丘陵から東へ舌状に張り出す標高10～30mほどの長岡丘陵、二本・朝日丘陵と呼称している小規模な段丘面から成る。山地の東側に展開する広大な沖積地は仙台平野南部域に相当し、岩沼西部丘陵の東縁から太平洋まで7～8kmの幅をもつ。この沖積平野は阿武隈川をはじめ、志賀沢川などの中小河川の堆積作用によつて形成され、自然堤防の発達が顕著である。また、浜堤も発達しており、市域では大きく分けて、岩沼市街地、玉浦地区、海岸地区の三列の浜堤列が確認できる。本報告対象となる原遺跡は、阿武隈川北岸から200～300mほど北に位置し、阿武隈川北岸に形成された自然堤防上に立地している。



第3図 岩沼市の位置と地形分類

2. 歴史的環境

岩沼市域では、これまでに縄文時代から近代にかけての遺跡が 64 箇所で確認されている。近年、東日本大震災の復興事業に伴う発掘調査や、岩沼市史編纂事業に伴う学術調査により、地域の歴史を解明するための新たな成果が報告されている。以下に各時代の概略を記す。

縄文時代

縄文時代の遺跡は、市域西側の丘陵部に点在し、晩期の遺物が多量に発見された下塙ノ入遺跡【14】など、特に志賀沢川流域の志賀・小川地区にまとまって分布している。また、沖積地を望む丘陵上に立地する山畑南貝塚【9】や畠堤上貝塚【36】では、汽水域に生息するヤマトシジミを主体とした貝層の形成もみられる。北原遺跡【7】では、中期後葉の土坑が 50 基近く検出され、磨消縄文を特徴とする土器のほか、石錐や石棒などが発見された。鶴ヶ崎城跡【23】では、第4地点の発掘調査において、鶴ヶ島台式や梨木畳式に比定される早期末の土器群が見つかっている（岩沼市史編纂委員会 2015）。

弥生時代

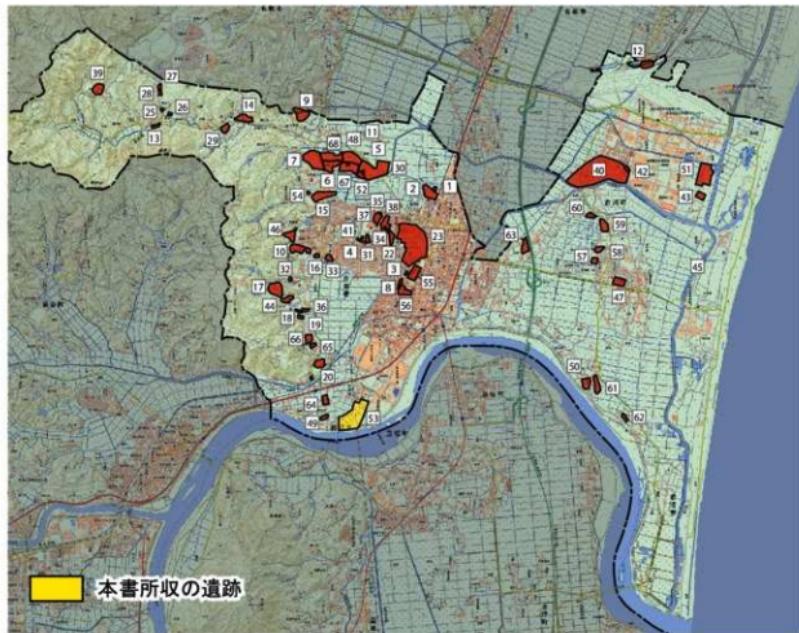
弥生時代の遺跡は縄文時代と同様、市域西側の丘陵部に多く分布している。しかしながら上根崎遺跡【30】や朝日古墳群【37】、平野部に位置するかめ塚西遺跡【2】でも土器の散布が認められ、人間の営みが太平洋側へ拡大する様子をうかがい知ることができる。鶴ヶ崎城跡【23】では、中期後葉と考えられる竪穴建物跡や十三塚式に比定される土器および石包丁などの石器が発見されている。北原遺跡【7】では、北関東を中心に分布する十王台式に並行するものとみられる、後期後半と推量される土器が見つかっている。また、杉の内遺跡【6】では粗痕のある土器も採集されている。（岩沼市史編纂委員会 2015）。

古墳時代

古墳時代の遺跡は高塚古墳、横穴墓、集落跡などが市内各所にみられる。高塚古墳のうち、県指定史跡のかめ塚古墳【1】では、古墳周溝の発掘調査において土師器や須恵器のほか、底面から一本二又鋤が出土した。また、地表に顯在する全長約 39 m の柄鏡形の埴丘は周囲が後世に削られたものであり、本来は全長約 48 m を測る撥形の前方後円墳であったことが確認されている。造成時期はこれまで中期と考えられてきたが、遺物の年代や古墳の立地条件、埴丘の形態などの点から前期にさかのぼる可能性が示されている（岩沼市史編纂委員会 2015、岩沼市教育委員会 2021）。

横穴墓は岩沼西部丘陵から派生する低位丘陵の斜面で多く造られ、これまでに 10 箇所の横穴墓群が確認されている（消滅した横穴墓群を含む）。このうち、長谷寺【10】、丸山【3】、二木【8】、土ヶ崎【22】、引込【31】、平等山【16】などの横穴墓群の発掘調査では、7世紀前半頃から造営が開始され、8世紀前半頃まで機能していたと考えられている（岩沼市史編纂委員会 2015、岩沼市教育委員会 2019c）。

集落遺跡では北原遺跡【7】をはじめとする長岡丘陵遺跡群が前期の集落跡として知られるが、そこから南へ約 500m の位置に所在する熊野遺跡【15】でも、同時期の竪穴建物跡群が発見された。また、孫兵衛谷地遺跡【12】では前期の塩釜式に位置付けられる土師器を含む遺物包含層の存在が明らか



第4図 岩沼市域の遺跡分布図

第1表 岩沼市域の遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
53	駅遺跡	古墳・古代	23	駒ヶ崎城跡	圓文・秀生・中世・近世	48	長塚北遺跡	圓文・古墳・古代
1	かめ塙古墳	古墳	25	八森A遺跡	圓文	49	南玉崎遺跡	圓文・古墳
2	かめ塙西遺跡	弥生・古墳	26	八森B遺跡	圓文	50	西須賀東遺跡	古代
3	山山崎穴穂群	古墳	27	銅谷A遺跡	圓文・近世	51	高大瀬遺跡	古墳・古代
4	白山崎穴穂群	古墳	28	銅谷B遺跡	圓文・近世	52	長徳寺前遺跡	近世
5	新明塙古墳	古墳	29	新宮下遺跡	圓文	54	中ノ原遺跡	中世
6	村の内遺跡	弥生・古墳・古代	30	上祖崎遺跡	圓文・秀生・古代・中世	55	丸山遺跡	中世・近世
7	北原遺跡	圓文・秀生・古墳・古代	31	引込横穴穂群	古墳	56	竹脇神社境内遺跡	中世・近世
8	二木横穴穂群	古墳	32	古闇山塙跡	秀生・古墳	57	新間下遺跡	古代
9	山越前田塙	圓文・古代	33	新田遺跡	圓文・古代	58	沿前遺跡	古代
10	長谷寺横穴穂群	古墳	36	御壁1号塙	圓文・古墳・古代	59	西土手遺跡	中世
11	長塚古墳	古墳	37	朝日1号塙	秀生・古墳・中世・近世	60	前綾遺跡	古代
12	孫兵衛谷遺跡	古墳前	38	朝日遺跡	古墳・古代・中世	61	利原遺跡	古代
13	大日遺跡	圓文	39	岩就今遺跡	圓文・古代・中世	62	高原遺跡	中世
14	下塙ノ人遺跡	圓文	40	下野鶴ケ跡	古墳・古代・中世・近世	63	丁中筋遺跡	古代・中世
15	熊野遺跡	古墳・古代	41	白山塙	近世?	64	殖遺跡	古代・中世
16	平勞山横穴穂群	古墳	42	新外遺跡	古代	65	柳遺跡	古墳・古代
17	新削跡	中世	43	にら塙遺跡	古墳・古代	66	台遺跡	圓文・秀生
18	御堤1号塙	古墳	44	新館今遺跡	圓文・古代	67	長塙遺跡	圓文・古墳
19	根方室遺跡	弥生・近世	45	白山塙(木曳塙)	近世	68	上小町遺跡	秀生・古墳・古代
20	長谷古削跡	古墳	46	竹倉部遺跡	秀生・古墳・古代			
22	下ヶ崎横穴穂群	古墳	47	新田東遺跡	奈良・中世・近世			

となった。中期以降の様相については遺物の発見が少なく判然としないが、下野郷館跡【40】では南小泉式の土師器壺が出土し、第Ⅱ浜堤列上でも将来、古墳時代の集落遺跡の発見が期待される（岩沼市教育委員会 2018b、岩沼市史編纂委員会 2015）。

古代

本報告を行う原遺跡【53】に近接する南玉崎遺跡【49】や樋遺跡【64】では、土師器・須恵器などが出土しており、このうち樋遺跡では7世紀末～8世紀初頭頃に位置付けられる須恵器の高台壺などが出土している（岩沼市史編纂委員会 2015）。かめ塚西遺跡【2】では、上幅3～4m、下幅2～3m、深さ1mほどの大溝が100m以上にわたって直線状に延びることが確認されている。この溝の最上層には灰白色火山灰が堆積し、その西側では長方形を基調とする柱穴や円面窓の出土も確認されていることから、官衙的な施設の存在も考慮されている（岩沼市教育委員会 2021）。岩藏寺遺跡【39】の所在する岩藏寺には、平安時代後期に製作されたと考えられる木造如来像が現存する。発掘調査では、小石を塚状に集積した遺構の底面で火を焚いた痕跡と須恵系土器の壺が発見されており、平安時代から何らかの祭祀行為を行っていた可能性が考えられている（岩沼市史編纂委員会 2018）。北原遺跡【7】や熊野遺跡【15】では、7世紀末から10世紀前半にかけての堅穴建物跡が発見されている（岩沼市教育委員会 2019b）。

中世

中世の遺跡は、過去に朝日古墳群【37】、朝日遺跡【38】、鶴ヶ崎城跡【23】、丸山遺跡【55】、竹駒神社境内遺跡【56】、下野郷館跡【40】、西須賀原遺跡【50】、中ノ原遺跡【54】、岩藏寺遺跡【39】、刈原遺跡【61】、上根崎遺跡【30】などで発掘調査が行われている。平成27年（2015）の熊野遺跡【15】の発掘調査において長軸3.9m、短軸2.4mを測る方形堅穴遺構が確認された。これは倉庫的な性格を持つ遺構と推定されるが、底面からは龍泉窯系の鎌運弁文青磁碗片が出土していることから当該地周辺の中ノ原遺跡で発見された板碑を伴う蔵骨器に納められた被葬者と関わりを持つ在地富裕層などが存在した可能性がある（岩沼市史編纂委員会 2015・2018、岩沼市教育委員会 2019b）。

近世

本市は近世において城下町、宿場町として発展し、竹駒神社の門前町としても賑わいを見せたといわれ、調査実績もほかの時代に比べて多い傾向にある。丸山遺跡【55】、竹駒神社境内遺跡【56】、下野郷館跡【40】、西須賀原遺跡【50】、西土手遺跡【59】、新筒下遺跡【57】、刈原遺跡【61】、高原遺跡【62】などで発掘調査が行われ、仙台藩政期の社会を研究する上で貴重な成果が得られている。鶴ヶ崎城跡【23】第1地点の調査では、溝跡や石積み遺構、碗埋納遺構などが検出され、第4地点では土壘の補・改修痕跡が確認された。遺物では、15世紀前半頃の龍泉窯系青磁盤や天目釉を施した瀬戸産小壺などが出土した（岩沼市教育委員会 2005b、岩沼市史編纂委員会 2015）。

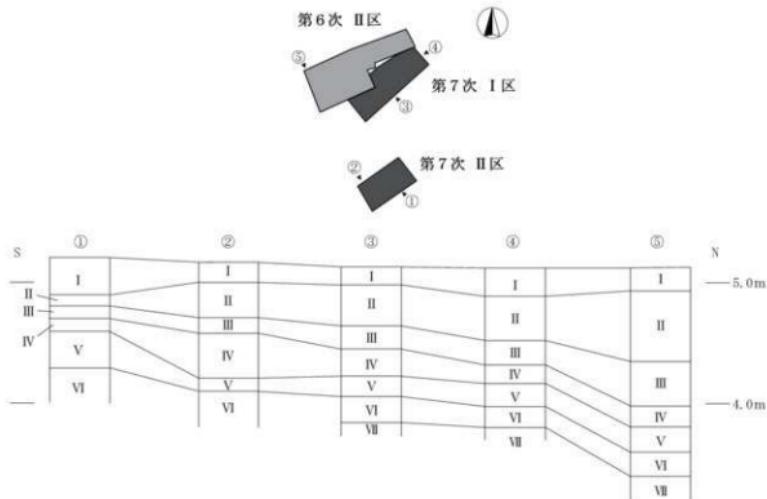
原遺跡【53】の所在する玉崎地区の渡邊家は、江戸時代に仙台藩より阿武隈川舟運の統制を命じられ、船からの税徵収や米などの商品運送を手掛けて玉崎問屋と呼ばれた。また、歌枕としても知られる玉崎地区的「稲葉（田沢）の渡し」は、市域にいくつか存在した渡しの中でも最も古くからあつたと考えられている。玉崎地区は古代以来、水陸交通の要衝に位置した（岩沼市史編纂委員会 2018）。

第III章 調査成果

1. 基本土層

今回の調査地点は1枚の水田として利用されている。標高は5.0～5.1mであるが、水田耕作土以下の旧地形はゆるやかに北西側へ傾斜している。この状況は、同一敷地で調査した第6次調査II区北西部で確認した旧河道側へ傾斜する旧地形（第5図⑤）に起因するとみられる。主な遺構検出面はIII層の黒褐色シルト層上面とIV層の暗褐色シルト層上面であるが、III層直下から掘り込まれる遺構に関してはIV層で平面的に確認できるものは少ないため、V層の黒褐色粘質シルト上面を古代遺構の確認面としている。なお、遺跡地全体に広がるIII層については、III層の下位より掘り込まれる遺構に中世以降の遺物が見られず、またIII層を掘り込む遺構からは室町～戦国期以降の遺物が多いことから、形成時期については中世段階と考えている。

第7次調査では、どちらの調査区においてもI層とII層を重機で除去した後に、III層上面で遺構精査を実施し、その後人力でIV層の段階的に掘り下げと精査を繰り返しながら、最終的にV層上面で遺構の調査を実施した。



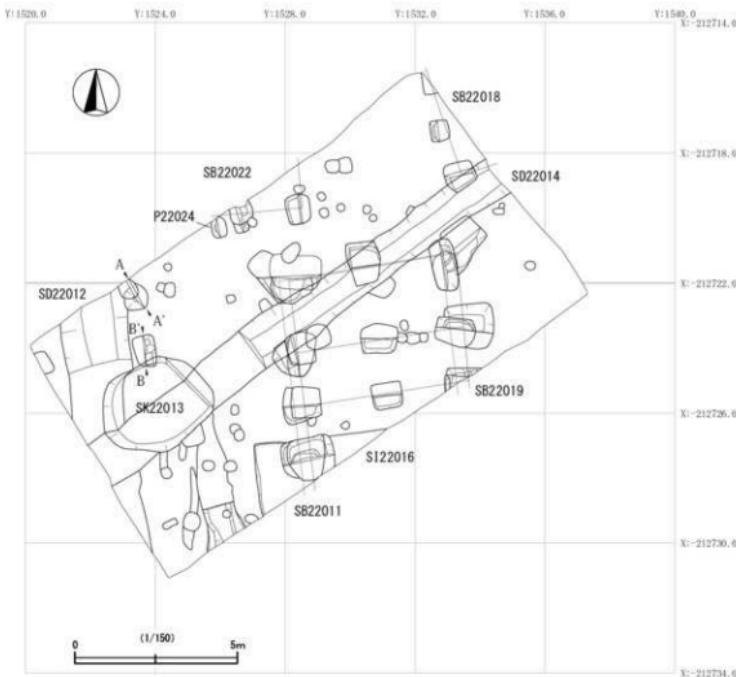
第7次調査 基本土層注記

No.	土色	土質	備考
I	にぶい黄褐色	10YR4/3 粘質シルト	しまり弱い、粘性やや強い。現在の水田耕作土。
II	灰黃褐色	10YR4/2 シルト	しまりやや弱い、粘性やや弱い。耕作土。
III	黒褐色	10YR2/3 粘質シルト	しまりやや弱い、粘性やや弱い。旧層直下から各遺構は掘り込みがある。
IV	暗褐色	10YR3/3 シルト	しまりやや弱い、粘性やや弱い。
V	黒褐色	10YR2/3 粘質シルト	しまりやや弱い、粘性やや弱い。遺構確認。なお、V層直下からも遺構の掘り込みを確認。
VI	暗褐色	10YR3/3 粘質シルト	しまりやや弱い、粘性やや弱い。西側では砂質感が強くなる。再生土器？包含層。
VII	褐色	10YR4/6 砂	しまり弱い、粘性やや弱い。粒径は細粒砂程度。上位ほど暗褐色粘土粒を含む。

第5図 第7次調査基本層序



第6図 I区平面図



第7図 II区平面図

2. 発見された遺構と遺物（第6・7図）

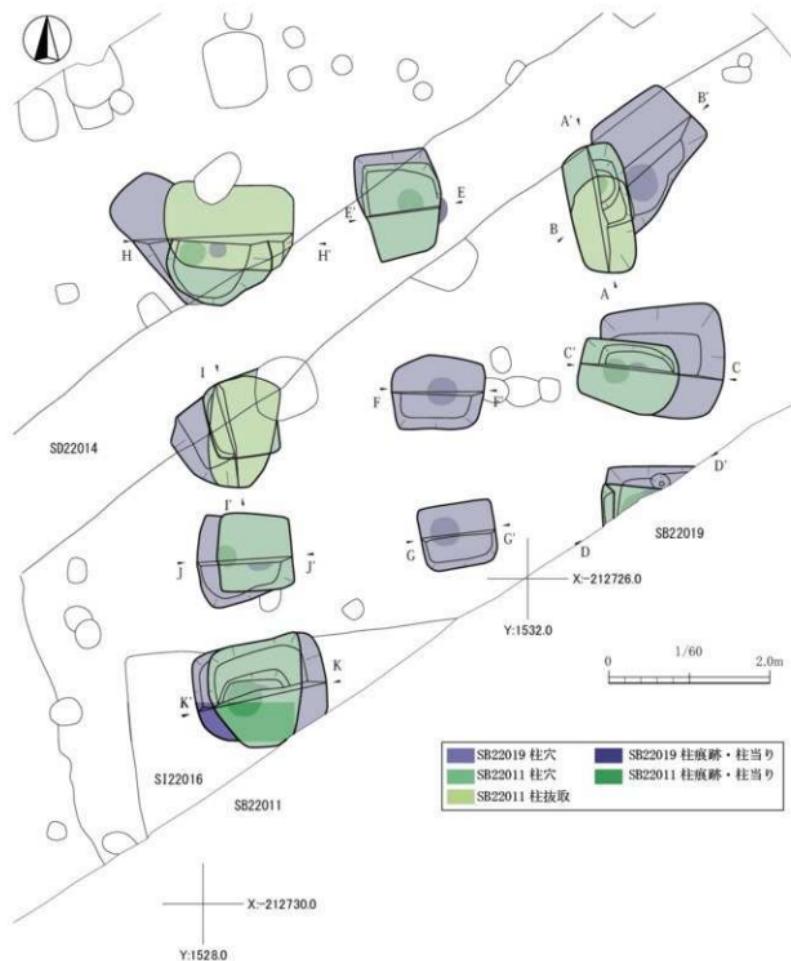
第7次調査では、調査面積 255 m² の I 区、そして調査面積 137 m² の II 区で調査を実施した。調査で確認した遺構は I 区では堅穴建物跡 1 棟、古代大溝を含む溝跡 2 条、土坑・柱穴群である。II 区では掘立柱建物跡 4 棟、柱列跡 1 列、堅穴建物跡 1 棟、近世大型土坑 1 基、中世後期の溝跡 1 条、古代大溝 1 条、土坑・柱穴群である。なお、I 区の小柱穴の大半は III 層上面からの掘り込みである。

出土遺物は I・II 区ともに古墳時代終末期から平安時代の土師器・須恵器が多数を占め、ごく僅かに砥石・石臼など石製品、鐵鍼・鐵斧などの金属製品、古墳時代前期の土師器、中世陶器、近世陶磁器が含まれる。遺物は主に遺構内、及び遺構精査時に出土しているが、重機による表土掘削でも出土している。出土遺物の総数は整理箱で 20 箱程度である。以下に発見された遺構別に詳述する。

a. 堀立柱建物跡

【SB22011】(第8～10図)

II区中央東寄りに位置する。SB22019、SI22016、SD22014と重複関係にあり、SB22019、SI22016より新しく、SD22014より古い。南側が調査区外へ延びるために全体の規模は不明であるが東西2間、南北3間以上の南北棟であり、桁行長は5.52m以上、梁行総長5.04mを測る。建物の主軸方位は、



第8図 SB22011・22019

西列で計測すると真北から 6° 西へ傾く。柱穴掘方の平面形は柱抜取穴によって失われる P1・7・8 を除くと長軸 134 ~ 96 cm、短軸 114 ~ 84 cm を測る長方形ないしは方形を基調としている。柱穴は桁行・梁行に対して直交ないしは平行して掘られる。柱痕跡は抜取が行われている前述の 3 穴以外のすべてで認められているほか、抜取が行われている柱穴でも柱の荷重によって変質したとみられる痕跡が看取できたことから、柱筋のとおりは概ね良好であることを確認している。確認した柱痕跡は 22 ~ 38 cm ほどの円形である。掘方の埋土は、基本層 V 層である黒褐色粘質シルトや VIII 層である褐色粘土をブロック状に含んでいる。なお、本遺構は後述する SB22019 とほぼ同位置で、同規模の様相を示すことから SB22019 の建替えとみられるが、SB22019 では建物中央に床東とみられる柱穴列が伴うことに対し、本遺構に伴う柱穴列は確認されていない。

遺物は第 10 図 1 に図示した須恵器壺のほか、小片のため図示を見送ったが非ロクロ成形の土師器壺・甕、須恵器甕が出土している。図示した遺物は年代観を明示しうる資料ではないが、本遺構の西側で同様の主軸方位を呈する SD22012 大溝の成果をあわせ考えると、本遺構は 8 世紀代を中心とした年代観が考えられる。

【SB22018】(第 11・12)

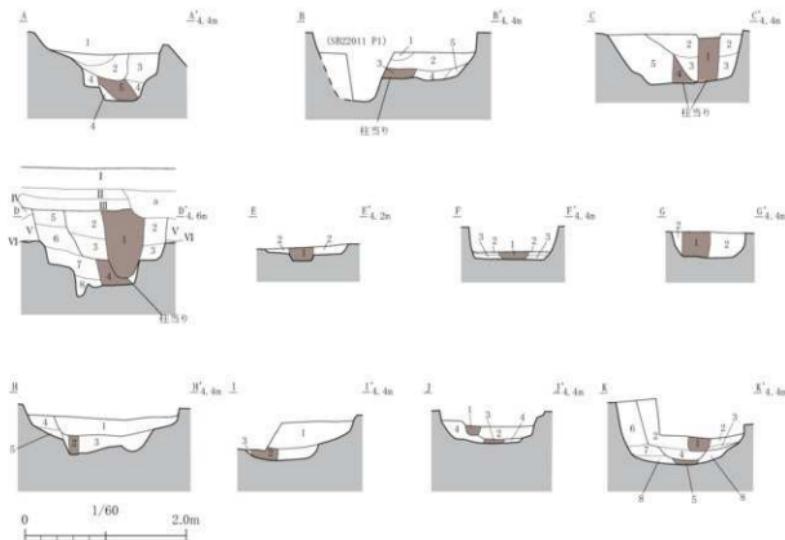
II 区北東部に位置する。SD22014 と重複関係にあり、これより古い。北及び東側が調査区外へ延びるために全体の規模は不明であるが南北方向の 2 間を確認した。建物の主軸方位は、真北から 16° 西へ傾く。柱穴掘方の平面形は長軸 92 ~ 60 cm、短軸 80 ~ 60 cm を測る長方形ないしは方形を基調としている。柱穴は桁行に対して平行して掘られ、コーナー部分では直交して掘られている。柱痕跡はすべてで認められているが、確認した範囲での柱筋のとおりはやや悪い。柱痕跡は 30 cm ほどの円形である。掘方の埋土は、基本層 V 層である黒褐色粘質シルトや VIII 層である褐色粘土をブロック状に含んでいる。

遺物は柱掘方よりごく少量の土師器壺・甕片が出土している。これらは非ロクロ成形であるが、細片のため図示できなかった。

【SB22019】(第 8~10 図)

II 区中央東寄りに位置する。SB22019、SI22016、SD22014 と重複関係にあり、SI22016 より新しく、SB22019、SD22014 より古い。南側が調査区外へ延びるために全体の規模は不明であるが東西 2 間、南北 3 間以上の南北棟であり、桁行長は 5.52 m 以上、梁行総長 5.22 m を測る。建物の主軸方位は、西列で計測すると真北から 6° 西へ傾く。柱穴掘方の平面形は本遺構の建替えである SB22011 の建設にあわせて柱材の抜取が行われているため、規模の復元は困難であるが、P2・10 を手掛かりに考えると長軸 168 ~ 148 cm、短軸 140 ~ 88 cm を測る長方形を主体としていたと可能性がある。柱穴の大半は桁行・梁行に対して直交して掘られるが、四隅の柱穴は長辺が建物に対して 45° ほど傾く。また建物内部の中央には側柱の柱穴より小型の長軸 112 ~ 92 cm、短軸 90 ~ 78 cm を測る長方形の柱穴が確認できた。この柱穴列は桁側・梁側の両者とも柱筋が通ることから床東の可能性が考えられる。柱痕跡は前述のとおりすべての柱穴で抜取を行った後に SB22011 を建設しているために平面的な確認は一切できないが、柱の荷重によって変質したとみられる痕跡が看取でき、西側列と北側列では柱筋の通りは良いが、東側ではやや不揃いとなる可能性があることを確認している。掘方の埋土は、基本層 V 層である黒褐色粘質シルトや VIII 層である褐色粘土をブロック状に含んでいる。

遺物は第 10 図 2 に図示した土師器壺のほか、小片のため図示を見送ったが非ロクロ成形の土師器



第9図 SB22011・22019 土層断面図

SB22011 PI 南北セクション

No.	土色	土質	備考
1	暗褐色	10YR3/3	シルト しまりや弱い。粘性やや弱い。黒色粘土粒。にぶい黃褐色砂質シルト粒をやや多く含む。
2	褐灰色	10TR4/1	粘質シルト しまりや弱い。粘性やや強い。黑色粘土。にぶい黃褐色砂質シルト小ブロックを少量含む。全体に酸化鉄が付着する。
3	暗褐色	10YR3/3	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。にぶい黃褐色シルト小ブロック。黒色粘土粒を少量含む。
4	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト しまりやや弱い。粘性強い。灰褐色シルト小ブロック。黒色粘土小ブロックを多量に含む。
5	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト しまりやや弱い。粘性強い。グラウド化した灰褐色砂質シルト中ブロックを少量含む。
6	灰黄褐色	10YR4/2	粘質シルト しまり弱い。粘性やや強い。黒褐色粘質シルト小ブロックを微量含む。

SB22019 PI 東西セクション

No.	土色	土質	備考
1	暗褐色	10YR3/3	シルト しまりやや弱い。粘性弱い。にぶい黃褐色砂質シルト粒を少量含む。
2	黒褐色	10YR3/2	シルト しまりやや弱い。粘性やや強い。多量のにぶい黃褐色シルトブロックと黒色粘土小ブロックをやや多く含む。
3	暗褐色	10YR3/3	シルト しまりやや弱い。粘性やや強い。グラウド化する柱状隙の外側及び底面に酸化鉄が集積している。
4	黒褐色	10YR3/1	粘質シルト しまり強い。粘性強い。兩色砂質シルト中ブロックをやや多く。少量の黒色粘土小ブロックを含む。
5	褐色	10YR4/4	粘質シルト しまり強い。粘性強い。兩色砂をごく少量含む。

SB22011 SB22019 P2 東西セクション

No.	土色	土質	備考
1	暗褐色	10YR3/3	シルト にぶい黃褐色砂質シルト小ブロックをやや多く含む。黒色粘土小ブロックを少量含む。しまり弱い。粘性やや強い。
2	暗褐色	10YR3/3	シルト しまり強い。粘性やや弱い。にぶい黃褐色砂質シルト小ブロックを多量に含む。黒色粘土小ブロックを少量含む。
3	暗褐色	10YR3/3	シルト しまりやや強い。粘性やや強い。にぶい黃褐色砂質シルト小ブロック粒をやや多く含む。黒色粘土粒を少量含む。
4	褐灰色	10TR4/1	シルト しまり弱い。粘性やや強い。土壤との境と下位に酸化鉄が集積。灰褐色粘シルト中ブロック及び黒色粘土粒を少量含む。
5	黒褐色	10YR3/2	シルト しまりやや強い。粘性やや強い。にぶい黃褐色砂質シルト。黒色粘土小ブロックを極めて多量に含む。

SB22011.22019 P3 東西セクション

No.	土色	土質	備考
1	暗褐色	10YR3/3	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。にぶい黄褐色シルトを板状に少量含む。
2	暗褐色	10YR3/3	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。黒色粘土。にぶい黄褐色シルトを板状に少量含む。
3	黒褐色	10YR3/1	シルト しまり強い。粘性やや強い。黒色粘土小ブロックをやや多く含む。にぶい黄褐色シルトを板状に少量含む。
4	黒褐色	10YR3/2	シルト しまり弱い。粘性やや強い。9層の透入か。黒色粘土小ブロック。褐色砂小ブロックを少量含む。
5	黒褐色	10YR2/3	砂質シルト しまり弱い。粘性強いくらい。褐色砂質シルト小ブロック。黒色粘土粒を少量含む。
6	黒褐色	10YR2/3	砂質シルト しまり弱い。粘性強いくらい。褐色砂質シルト粒を無数に含む。
7	暗褐色	10YR3/3	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。褐色砂質シルトを板状に微量含む。
8	黒褐色	10YR3/1	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。褐色砂質シルト小ブロックを多量、黒色粘土小ブロックを少量化する。
9	褐色灰	10YR4/1	粘質シルト しまり強い。粘性強いくらい。褐色砂質シルト小ブロック。黒色粘土小ブロックを極めて多量含む。
10	黒褐色	10YR2/3	砂質シルト しまりやや弱い。粘性強いくらい。褐色砂質シルト。黒色粘土粒を微量含む。

SB22011.19 P4 東西セクション

No.	土色	土質	備考
1	黒色	10YR3/1	砂質シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。褐色シルトが多量に含まれる。
2	暗褐色	10YR3/3	砂質シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。1層との接界面に褐色シルトを多量に含む。

SB22011.19 P5 東西セクション

No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	10YR3/1	粘土 しまりやや弱い。粘性強いくらい。褐色粘土を含む。
2	灰褐色	10YR3/1	粘土 しまりやや弱い。粘性強いくらい。少量の酸化鉄を含む。
3	にぶい黄褐色	10YR6/3	粘土 しまりやや弱い。粘性強いくらい。少量の酸化鉄を含む。

SB22011.19 P6 東西セクション

No.	土色	土質	備考
1	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂質シルト しまりやや強いくらい。粘性やや弱い。明褐色砂質シルトを少量含む。
2	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト しまりやや強いくらい。粘性やや弱い。明褐色砂質シルトを少量含む。

SB22011.19 P7 東西セクション

No.	土色	土質	備考
1	暗褐色	10YR3/3	シルト しまりやや強いくらい。粘性やや弱い。明褐色シルトを少量含む。酸化鉄が層全体に広がる。
2	黒褐色	10YR2/2	シルト しまりやや弱い。粘性やや強いくらい。黒色粘土小ブロックを微量含む。
3	黒褐色	10YR3/1	シルト しまりやや弱い。粘性やや強いくらい。黒色粘土小ブロックを多量含む。酸化鉄が層全体に広がる。
4	暗褐色	10YR3/3	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。黒色粘土小ブロックを微量含む。
5	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト しまりやや弱い。粘性やや強いくらい。褐色シルト小ブロックをやや多く含む。

SB22011.19 P8 南北セクション

No.	土色	土質	備考
1	暗褐色	10YR3/3	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。黒色粘土小ブロックを多量、にぶい黄褐色砂質シルト小ブロックを少量含む。
2	黒褐色	10YR2/2	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。にぶい黄褐色砂質シルト小ブロックをやや多く含む。
3	黒褐色	10YR3/1	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。褐色砂質シルト小ブロックを多量含む。

SB22011.1-22019 P9 東西セクション

No.	土色	土質	備考
1	暗褐色	10YR3/3	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。にぶい黄褐色砂質シルト板状に少量含む。
2	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト しまりやや弱い。粘性強いくらい。
3	暗褐色	10YR3/3	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。にぶい黄褐色砂質シルト小ブロックを多量に含む。
4	暗褐色	10YR3/3	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。褐色砂質シルトを板状に微量に含む。

SB22011・22019 P 10 東西セクション

No.	土色	土質	備考
1	暗褐色	10VR3/3	シルト しまりやや弱い、粘性やや弱い。黒色粘土小ブロックを少量含む。
2	暗褐色	10VR3/3	シルト しまりやや弱い、粘性やや弱い。黒色粘土にぶい黄褐色小ブロックを微量に含む。
3	暗褐色	10VR3/3	シルト しまりやや弱い、粘性やや弱い。黒色粘土にぶい黄褐色粘土粒を微量に含む。
4	暗褐色	10VR3/3	シルト しまりやや強い、粘性やや弱い。褐色砂質シルト粒を微量に含む。
5	黒褐色	10VR2/3	粘質シルト しまりやや弱い、粘性やや弱い。黒色粘土粒を少量含む。
6	黒褐色	10VR2/1	シルト しまりやや弱い、粘性やや弱い。褐色砂質シルト粒を微量に含む。
7	黒褐色	10VR2/2	シルト しまりやや弱い、粘性やや弱い。黒色粘土小ブロックをやや多く含む。
8	黒褐色	10VR3/2	粘質シルト しまりやや弱い、粘性やや弱い。黒色粘土小ブロックをやや多く含む。



第10図 SB22011・22019 出土遺物

SB22011・22019 遺物観察表

No.	細部・層位	種別	器種	外面	内面	現存	法量(cm)			厚真	壁厚	登録番号
							口径	底径	高さ			
1	SR22011 PT	須恵器	环	ロクロナダ 底部回転ハラギリ後ハラケズリ調整	ロクロナダ	底部1/6	-	(8.5)	-	-	46	
2	SR22019 P2	土器器	环	口縁ヨコナダ 体部ハラケズリ	ハラミガキ・黑色処理	底部1/5	-	-	(4.5)	10-1	30	

壺・甕が出土している。図示した遺物は非ロクロ成形であり、口唇部を欠くため器形全体の様子は判然としない。また柱掘方からの出土であり、遺構の年代観を明示しうる資料ではない。しかしながら、本遺構の西側で同様の主軸方位を呈するSD22012 大溝の成果、及び建替えとみられるSB22011 の存在をあわせ考えると、本遺構は8世紀代を中心とした年代でも前半段階に属する可能性が考えられる。

【SB22022】(第11・12)

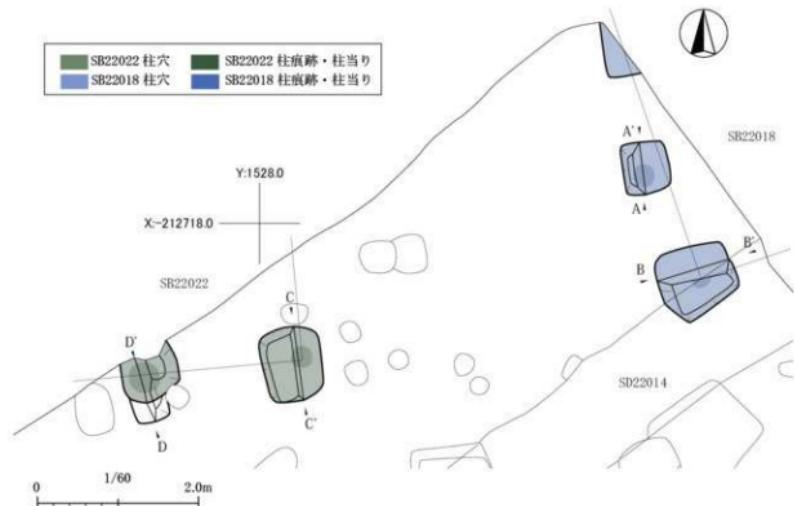
II区中央北部に位置する。北及び西側が調査区外へ延びるために全体の規模は不明であるが、東西方向の1間分を確認した。建物の主軸方位は、真北から85° 東へ傾く。柱穴掘方の平面形は長軸90cm、短軸72~70cmを測る長方形を基調としている。柱穴は梁行に対して直交して掘られている。柱痕跡はすべてで認められているが、部分的な確認のため、柱筋とのおりの様子については不明である。柱痕跡は34~22cmほどの円形である。掘方の埋土は、基本層V層である黒褐色粘質シルトやⅦ層である褐色粘土をブロック状に含んでいる。

遺物は柱掘方を中心にごく少量の土器器壺・甕片が出土している。これらは非ロクロ成形であるが、細片のため図示できなかった。

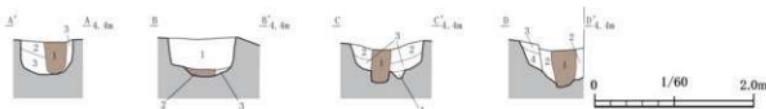
b. 柱列

【SA22021】(第7・13図)

II区西北部に位置する。本遺構は何らかの施設を取り囲むとみられる区画溝のSD22002・22012と平行して存在しているが、P2より南側では確認できないことから、これより北側に展開している可



第11図 SB22018・22022



第12図 SB22018・22020 土層断面図

SB22018 P2 南北セクション

No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	10YR3/2	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。炭化物を微量含む。柱痕跡。
2	暗褐色	10YR3/3	シルト しまりやや強い。粘性やや強い。塊状を多く含む。
3	黒褐色	10YR3/1	粘質シルト しまり強い。粘性やや強い。褐色砂質シルト小ブロックをやや多く含む。褐色粘質シルト小ブロックを少量含む。

SB22018 P3 東西セクション

No.	土色	土質	備考
1	暗褐色	10YR3/3	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。にいに黄褐色砂質シルト小ブロックを多量、黒色粘土小ブロックを少量含む。
2	灰黃褐色	10YR4/2	シルト しまりやや弱い。粘性やや強い。褐色砂質シルト小ブロックを微量含む。柱痕跡。
3	暗褐色	10YR3/3	シルト しまりやや弱い。粘性やや強い。黑褐色シルト小ブロックを少量含む。

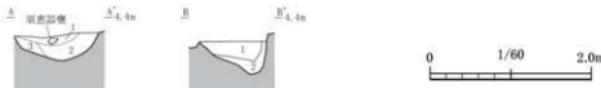
SB22022 P1 南北セクション

No.	土色	土質	備考
1	灰黃褐色	10YR4/2	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。塊状を微量含む。柱痕跡。
2	暗褐色	10YR3/3	シルト しまりやや強い。粘性やや強い。無色鉄を大量に含む。黒褐色シルト小ブロックを少量含む。
3	黒褐色	10YR3/2	シルト しまりやや強い。粘性やや強い。褐色粘土小ブロック、褐色砂質シルト小ブロックを少量含む。
4	黒褐色	10YR2/3	シルト しまりやや強い。粘性やや強い。灰黃褐色シルトを微量含む。

第III章 調査成果

SB2022 P2 南北セクション

No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	10YR2/3	シルト しまり弱い、粘性やや強い。燒土粒、黒色粘土を少量含む。柱痕跡。
2	黒褐色	10YR3/1	シルト しまりやや強い。粘性やや弱い。燒土粒を少量。褐色絆質シルト小ブロックを微量含む。
3	黒褐色	10YR2/2	シルト しまりやや弱い。粘性やや強い。燒土粒、炭化物を少量含む。
4	褐色	10YR4/4	粘質シルト しまりやや弱い。粘性やや強い。黒褐色粘質シルト小ブロックを少量含む。



第13図 SB2020 土層断面図

SA2020 P1 南北セクション

No.	土色	土質	備考
1	暗褐色	10YR1/3	シルト しまり・粘性やや弱い。燒土・炭化物を多く含む。炭化岩盤片出土。
2	褐色	7.5YR4/4	砂質シルト しまりやや強い。粘性やや弱い。炭化物を少量含む。
3	暗褐色	7.5YR1/3	砂質シルト しまりやや強い。粘性強い。

SA2020 P2 南北セクション

No.	土色	土質	備考
1	暗褐色	10YR1/3	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。黒色粘土粒を少量含む。
2	暗褐色	10YR3/2	シルト しまりやや強い。粘性やや弱い。黒色粘土粒を微量。にがい黄色砂質シルト小ブロックを少量含む。



第14図 SA2020 出土遺物

SI21003 遺物観察表

No.	縫部・部位	種別	器種	外面	内面	残存	法積 (cm)			写真 回数 No.
							口径	底径	高さ	
I	SA2020P2	土器	坪	口クロナゲ 底部系切後ヘラケズリ?	ヘラミガキ・黒色処理	口縫 1/3 底部 3/4	(16.0)	8.9	4.2	10-2 27

第2表 据立柱建物跡属性表

建物名	間数	棟方向	桁行 総長 (m)	柱間寸法 (m)	測定 柱列	梁間 総長 (m)	柱間寸法 (m)	測定 柱列	方向	柱底 筋径 (cm)	柱穴 規模 (cm)	備考
SB22011	2 × 3 以上	南北棟	5.52 以上	1.96/1.78/ 1.78	西列	5.04	西から 2.80/2.24	北列	N-6-E	38 ~ 22 円形	134 ~ 96 × 114 ~ 84	SB22019 の建替え SI22016 より新 SB22014 より旧
SB22019	2 × 3 以上	南北棟	5.52 以上	2.16/1.68/ 1.68	西列	5.22	西から 2.80/2.42	北列	N-6-E	40 ~ 29 円形	168 ~ 148 × 140 ~ 88	SI22016 より新 SB22019 + SB22014 より旧
SB22018	1 以上	不明	3.29 以上	北から 1.60/1.60	西列	-	-	-	N-16-E	30 円形	92 ~ 60 × 80 ~ 60	SB22014 より旧
SB22022	1 以上	不明	2.00 以上	2.00	南列	-	-	-	N-85-E	34 ~ 22 円形	90 × 72 ~ 70	

能性が高い。確認した検出長は1.5mを測る。主軸方位は、真北から6°西へ傾く。柱材は抜取が行われているために平面的な痕跡確認はできなかった。柱穴掘方は方形が主体であり、長軸90cm、短軸72~70cmを測る長方形を基調としている。

遺物は第14図1に図示したロクロ成形による土師器壺のほか、須恵器甕が出土している。図示した遺物は器高く、底径も大きい。さらに糸切ののちに、ヘラケズリによって丁寧な調整が行われている。また底部から口縁部にかけては若干内湾気味に立ち上がる。本遺構の西側で同様の主軸方位を呈するSD22012大溝の成果をあわせ考えると、本遺構は8世紀代でも後半を中心とした年代観が考えられる。

c. 壇穴建物

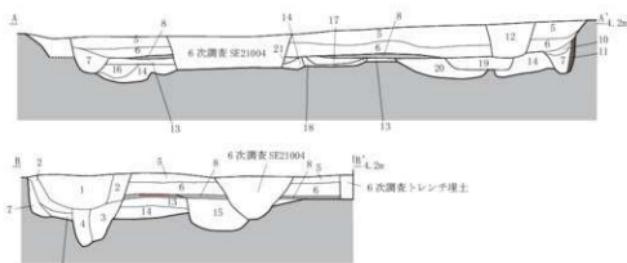
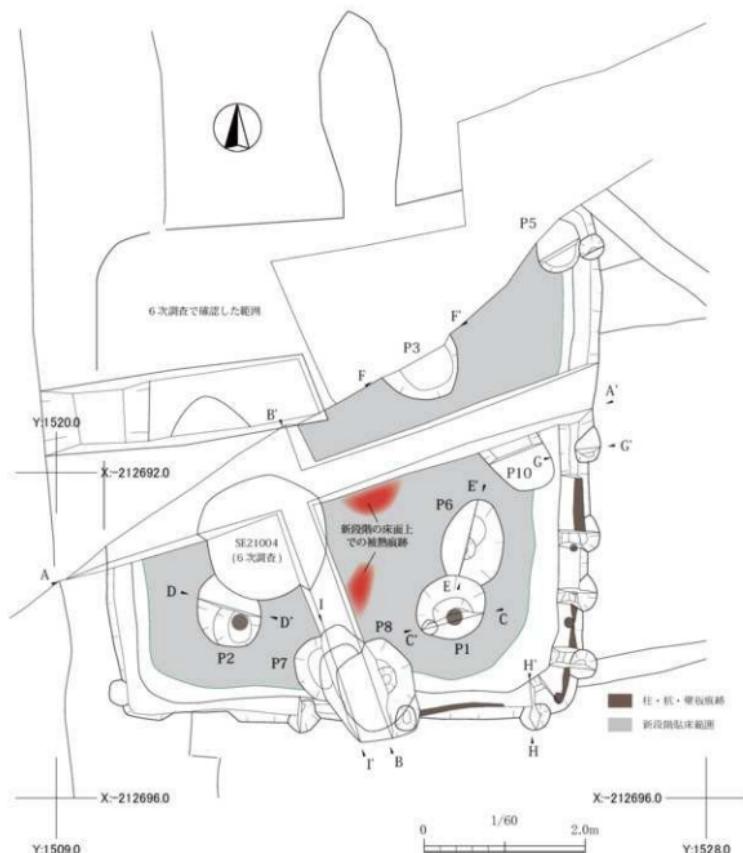
【SI22001】(第15~19図)

I区中央北寄りに位置する。SE21004、P7・8、SD22002と重複し、SE21004、P7・8より古く、SD22002より新しい。北側の一部は調査区外へ広がるが、第6次調査で北側部分についてはSI21010として範囲を確認している。平面形状は南北方向に紙長となる長方形とみられ、規模は東西が5.82m、南北は6.24m、確認面からの深さは40cmを測る。東壁で計測した主軸方向は真北から3°東へ傾く。カマドの詳細な調査は実施していないが、北壁中央のやや東寄りにつくられている。第6次調査で確認した煙道部は北壁際から長さ242cmを測る長煙道であり、幅は96cmを測る。なお、煙道部の両側面は、厚さ5~7cmほどの暗褐色粘土を用いて補強されていた。

床面は褐色砂質シルトを貼床として用いているが、建物使用時に中央から南側にかけて部分的に貼り増しを行っている。新段階の床面では、主柱穴2口(P1・2)とピット3穴(P3・5・6)を確認している。また、中央南寄りの床面の一部では、掘り込みを有さない強い被熱痕がみられた。確認した主柱穴はいずれも廐棄時に柱材の抜き取りが行われているが、下位では柱痕跡は確認でき、直径28cmの円形であった。南辺で確認した主柱穴の柱間の距離は270cmを測る。新段階の床面で確認できたピットはいずれも焼土・炭化物を含んだものである。この新段階の貼床の下からは、南壁中央付近で炉跡とみられる焼土遺構のほか、複数のピットを確認した。

炉跡とみられる焼土遺構については、本概要報告を作成する時点では採取した埋土の分析に着手していないため、詳細については本報告書作成時に譲るが、掘下げを行っている時点で少量の鉄滓を含んでいることを確認している。本遺構の南側は新段階の床面精査時に焼土の分布が確認されていたが、大部分は新段階の貼床に覆われていた。新段階の貼床を掘り下げて確認した規模は、西側をピットにより失うが長軸は約100cm前後とみられ、短軸は68cmを測る。形状は梢円形を呈する。確認面からの深さは30cmである。東側と北側の一部では炉壁とみられる強く比熱して硬化した粘土が認められている。底面は西側から東側へ緩く傾斜し、中央付近では被熱により赤変していた。堆積土中からはロクロ成形の土師器壺・甕、鉄斧が出土している。

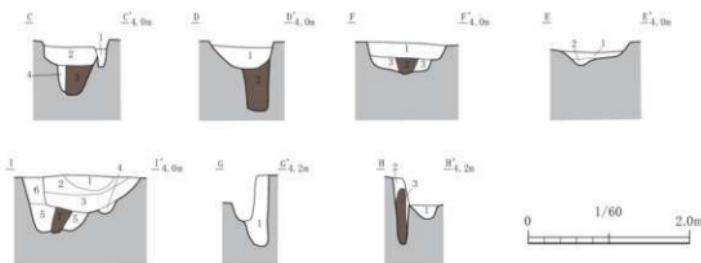
周溝は調査を行った範囲の東・南・西壁際の全てで確認できたことから、全周するとみられる。幅22~40cm、深さ16~20cmで、平面的な観察から南側と東側の一部では幅5cmほどの壁板材を設置していたとみられる痕跡が壁際に沿うように確認でき、断面観察でも壁板を据えたとみられるごく弱い凹みを確認している。なお、前述の焼土遺構は、埋土の一部が周溝に切られていることから、周溝は新段階の貼床敷設時に掘り直しが行われていた可能性がある。



第15図 SI22001(1)

SI22001 南北・東西ペルトセクション

No.	土色	土質	備考
1	暗褐色	10VR3/3	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。燒土粒、炭化物を少量含む。柱穴抜き取り穴。
2	暗褐色	10VR3/3	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。黃褐色砂質シルトブロックを多量に含む。
3	灰黄褐色	10VR3/2	粘質シルト しまり強い。粘性やや弱い。黃褐色砂質シルトブロックを多量に含む。
4	黒褐色	10VR3/2	シルト しまりやや弱い。燒土粒、炭化物を少量含む。柱痕跡。
5	暗褐色	10VR3/3	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。燒土粒をやや多く含む。
6	暗褐色	10VR3/3	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。燒土粒を少量含む。燒土粒の小ブロックを多量に含む。
7	灰黄褐色	10VR4/2	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。燒土粒中ブロックを多量に含む。硬柱穴の覆土。?は湖面覆土。しまりやや弱い。粘性やや弱い。
8	褐色	10VR4/4	砂 しまりやや弱い。粘性弱い。燒土。黒褐色粘土小ブロックを多量に含む。部分的に燒土、炭化物が上面(新床面)に分布する。
9	黒褐色	10VR2/2	燒土 しまり強い。粘性弱い。強く燃熱する。燒面と燒土为主体で炭化物を数見する。
10	黒褐色	10VR2/3	シルト しまり弱い。粘性やや弱い。黃褐色砂質シルトを状況に少量含む。
11	黒褐色	10VR2/3	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。褐色砂粒をやや多く含む。壁板材の痕跡か。
12	暗褐色	10VR3/3	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。燒土粒を多量に含む。SI22001より新しい。
13	黒褐色	10VR3/2	シルト しまり強い。粘性弱い。燒土(旧床面)。褐色砂質シルトを主体として混入し炭化物を微量に含む。
14	黒褐色	10VR3/1	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。刷り面。褐褐色砂質シルトブロックを多量に含む。
15	褐灰色	10VR4/1	粘質シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。焼熱した褐色砂質シルトを多量に含む。炭化物、燒土ブロックをやや多く含む。
16	黒褐色	10VR2/2	粘質シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。褐色砂質シルトブロックを少量含む。
17	暗褐色	10VR3/3	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。多量の燒土粒、少量の炭化物を含む。
18	褐灰色	10VR4/1	褐色砂質シルトブロック、燒土粒を少量、炭化物を微量に含む。
19	暗褐色	10VR3/3	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。多量の燒土粒、炭化物を含む。
20	黒褐色	10VR2/2	粘質シルト しまりやや弱い。粘性強い。燒土粒、炭化物、炭化物、炭化物を含む。
21	暗褐色	10VR3/3	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。多量の燒土粒と微量の炭化物を含む。



第16図 SI22001内造構土層断面図

SI22001 P1 (主柱穴) 東西セクション

No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	10VR2/2	粘質シルト しまり弱い。粘性やや弱い。炭化物をぐく微量含む。
2	暗褐色	10VR3/3	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。炭化物、燒土粒をやや多く含む。
3	暗褐色	10VR3/3	シルト しまり弱い。粘性弱い。柱痕跡、炭化物を少量含む。
4	暗褐色	10VR3/3	シルト しまり強い。粘性弱い。褐色砂小ブロックをやや多く含む。

SI22001 P2 (主柱穴) 東西セクション

No.	土色	土質	備考
1	暗褐色	10VR3/3	シルト しまりやや弱い。粘性やや強い。黒褐色粘土小ブロックをやや多く含む。炭化物、燒土粒を微量に含む。
2	にぶい黄褐色	10VR4/3	砂質シルト しまり弱い。粘性やや弱い。黒褐色。暗褐色粘土小ブロックを少量含む。褐色砂小ブロックを少量含む。柱痕跡。

SI22001 P3 東西セクション

No.	土色	土質	備考
1	暗褐色	10YR3/3	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。堆土粒をやや多く含む。
2	暗褐色	10YR3/3	シルト しまり弱い。粘性やや弱い。堆土粒を微量に含む。
3	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。堆土粒。炭化物を少量含む。

SI22001 P6 南北セクション

No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	10YR2/1	炭化物、堆土粒主体。褐色砂を少量含む。
2	褐色	10YR4/4	炭化物をごく微量に含む。

SI22001 P7 南北セクション

No.	土色	土質	備考
1	暗褐色	10YR3/3	シルト しまりやや弱い。粘性弱い。
2	暗褐色	10YR3/3	シルト しまりやや弱い。粘性弱い。
3	褐色	10YR4/6	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。褐色粘質シルト小ブロック。炭化物少量含む。
4	褐色	10YR4/4	粘質シルト しまり弱い。粘性やや強い。にぶい褐色粘質シルトブロックを多量に含む。
5	褐色	10YR4/4	砂質シルト しまり弱い。粘性やや強い。
6	暗褐色	10YR3/3	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。
柱	暗褐色	10YR3/4	シルト しまりやや弱い。粘性やや強い。

SI22001 壁柱穴 1 東西セクション

No.	土色	土質	備考
1	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂質シルト しまりやや弱い。粘性やや強い。黒褐色粘土中ブロックを多量に含む。

SI22001 壁柱穴 2 南北セクション

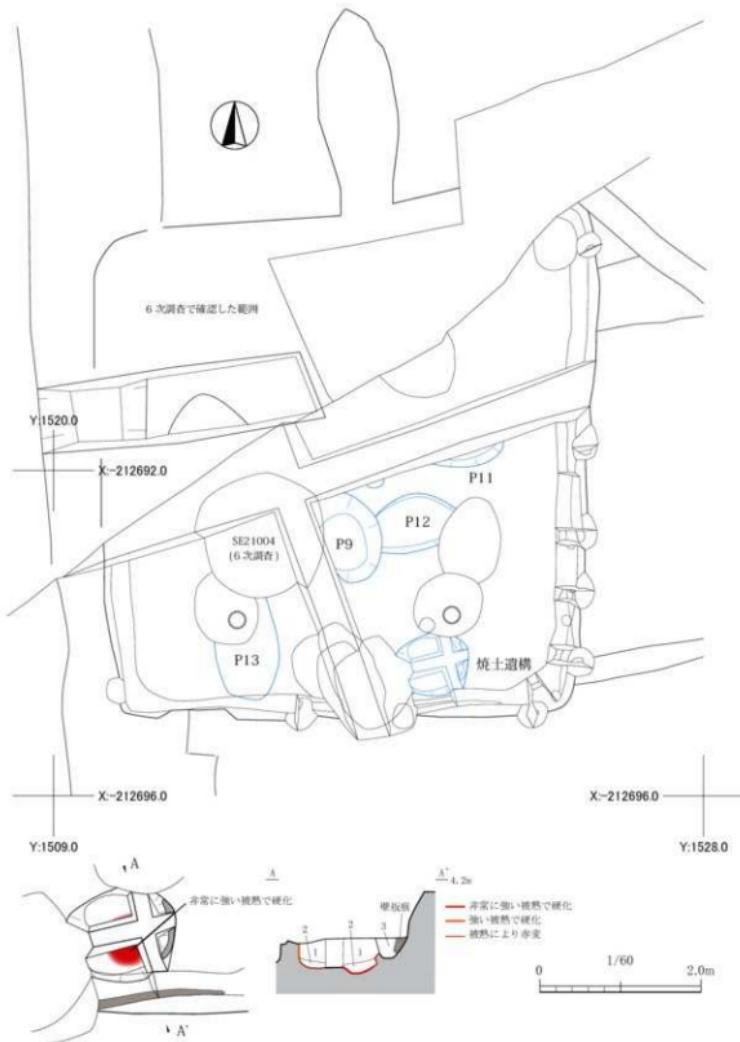
No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	10YR2/3	シルト しまりやや弱い。粘性弱い。褐色砂小ブロックをやや多く含む。炭化物を微量に含む。
2	黒褐色	10YR3/1	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。褐色砂を粒状にごく微量含む。
3	黒色	10YR2/1	粘土 しまり弱い。粘性弱い。柱崩断。褐色粘質シルト小ブロック少量含む。

SI22001 内 焼成遺構南北セクション

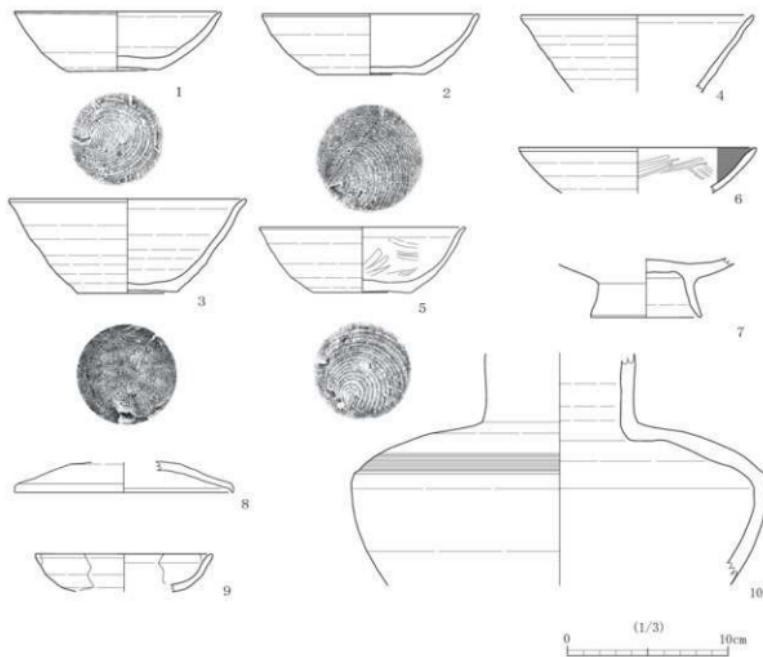
No.	土色	土質	備考
1	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト 極めて多量の堆土塊を含む。土部分も多数流人。炭化物を少量含む。
2	灰黃褐色	10YR4/2	砂質シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。灰焼土粒。炭化物をやや多く含む。
3	黒褐色	10YR3/2	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。褐色砂質シルト小ブロックを少量含む。
4	黒褐色	10YR2/3	シルト しまりやや弱い。粘性やや強い。褐色砂シルト粒を微量に含む。

このほか、東・南・西壁では部分的に壁柱穴がみられる。壁柱穴は東壁で 6 穴、南壁で 3 穴、西壁で 1 穴を確認している。壁柱穴には浅いものと深いものがあり、浅いものは周溝底面とほぼ変わらないが、深いものは遺構確認面から 80 cm を測る。一部では柱痕跡も観察でき、直径 14 cm ほどの円形であった。

遺物は堆積土中からの出土は少なく、床面上、床面遺構、及び炉跡を中心に出土している。このうち第 18 図 1・2 の須恵器壺、3・4 の須恵器壺、5・6 の土師器壺、7 の土師器高台壺、8 の須恵器蓋、9 の赤焼土器の可能性がある壺、10 の須恵器長頸瓶、第 19 図 11～18 の土師器甕、19 の鉄斧を図示した。須恵器壺・碗はいずれも回転系切ののち、未調整である。底部から口縁部にかけて直線的に開くものが多い。3・4 は底径が口径に比して小型化し、4 では口縁部がやや強く外反している。5 の土師器壺は炉跡とみられる焼土遺構内よりの出土である。ロクロ成形であり、内面の黒色処理は不明



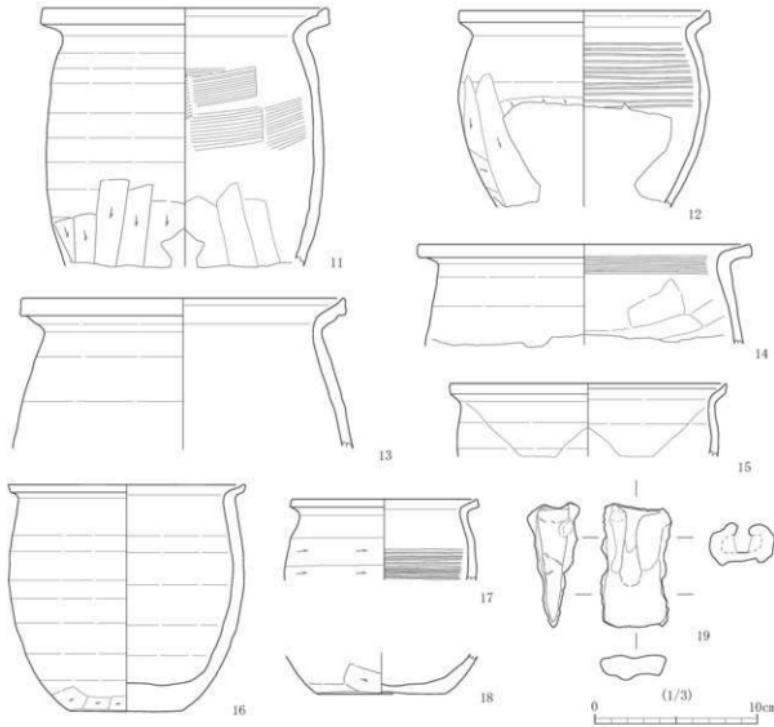
第17図 S122001(2)



SI22001 出土遺物観察表（1）

No.	細部・部位	種別	器種	外面	内部	残存	法量(cm)			写真	登録 No.
							口縁	底径	容積		
1	SI22001 P3	箱底器	杯	ロクロナデ 底部切削未調整	ロクロナデ	口縁1/3, 底部完存	13.0	5.8	3.7	10-3	1
2	SI22001	箱底器	杯	ロクロナデ 底部切削未調整	ロクロナデ	口縁1/3, 底部完存	(13.6)	6.8	3.8	10-4	2
3	SB22002 上層	箱底器	杯	ロクロナデ 底部切削未調整 体部と底部に墨書き?	ロクロナデ	口縁3/4, 底部完存	15.0	6.3	5.8	11-1	21
4	SI22001	箱底器	杯	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁1/5, 底部欠損	(14.6)	—	(4.7)	11-3	6
5	SI22001 少路	土師器	杯	ロクロナデ 底部切削未調整	ヘラミガキ(磨滅) ロク ロナデ 黒色処理不明	口縁1/4, 底部完存	(13.6)	6.1	4.1	10-5	3
6	SI22001 少路最辺の 割れ縫下げる	土師器	杯	ロクロナデ	ヘラミガキ	口縁1/6, 底部欠損	(14.8)	—	(2.8)	—	18
7	SI22001 上面底面構 造土盤下げる	土師器	高台杯	ロクロナデ 高台輪付	ヘラミガキ・黒色処理	高台輪 1/8	—	(7.0)	(3.7)	11-5	16
8	SI22001	箱底器	蓋	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁1/8	(13.8)	—	(1.9)	11-2	4
9	SI22001	辛夷土器	杯	ロクロナデ(不明瞭)	ロクロナデ(不明瞭)	口縁1/6, 底部欠損	(11.0)	—	(2.3)	11-4	7
10	SI22001	箱底器	長頸瓶	ロクロナデ 瓶頭にカキメ	ロクロナデ	口縁・底 部大根	—	—	(14.4)	10-7	20

第18図 SI22001 出土遺物 1



SI22001 出土遺物観察表（2）

No.	頸部・層位	種別	器種	外面	内面	残存	法量 (cm)			写真 図版 No.
							D径	底径	部高	
11	SI22001	土器器	便	ロクロナデ 下半はヘラケズリ	ロクロナデ・ヘラナデ・ナデ	D縦1/2, 底部欠損	(17.8)	—	(15.9)	11-7 13
12	SI22001 P11	土器器	便	ロクロナデ 縦方向のヘラケズリ	ロクロナデ 本口状工具によるナデ・ヘラナデ	D縦1/2, 底部欠損	(15.6)	—	(12.1)	11-6 10
13	SI22001の 貼付部下げる	土器器	便	ロクロナデ	ロクロナデ・ナデ	D縦1/4, 底部欠損	(20.0)	—	(9.3)	12-2 12
14	SI22001 底面	土器器	便	ロクロナデ	ロ縦ロクロナデ・部分的に ハケヌ	D縦1/4, 底部欠損	(20.6)	—	(6.2)	11-8 9
15	SI22001 P10	土器器	便	ロクロナデ	ロクロナデ	D縦1/6, 底部欠損	(17.2)	—	(4.5)	12-1 14
16	SI22001 P6	土器器	便	ロクロナデ 脊部下半で1段のヘラケズリ 底部凹軸 系切縫ヘラケズリ	ロクロナデ	D縦1/5, 底部完存	(14.8)	7.0	14.0	10-8 11
17	SI22001 P9	土器器	便	ロクロナデ 回転ヘラケズリ	ロクロナデ 本口状工具によるナデ 底部欠損	D縦1/5, 底部欠損	(11.6)	—	(5.0)	12-3 8
18	SI22001 P2	土器器	便	ロクロナデ 脊部半ヘラケズリ 底部凹軸系後ヘ ラケズリ	ロクロナデ	底部3/4	—	7.9	(2.5)	17
19	SI22001 金具品	鉄斧	重量: 118.5 g			完形	7.5	4.2	2.4	12-4 19

第19図 SI22001 出土遺物2

瞭であるが、わずかにヘラミガキの痕跡が看取できる。7の土師器高台壺は高台が高く、また比較的薄くつくられている。10の須恵器長頭瓶は第6次調査と今次調査で出土したものである。肩部にはカキメが施されている。11～18の土師器甕はすべてロクロ成形である。19の鉄斧は袋状鉄斧である。

なお、本遺構は第6次調査では部分的な確認（SI21010）であったことから、大溝との新旧関係では本遺構を古いものと位置づけたが、今回の調査成果から新旧関係を訂正する。

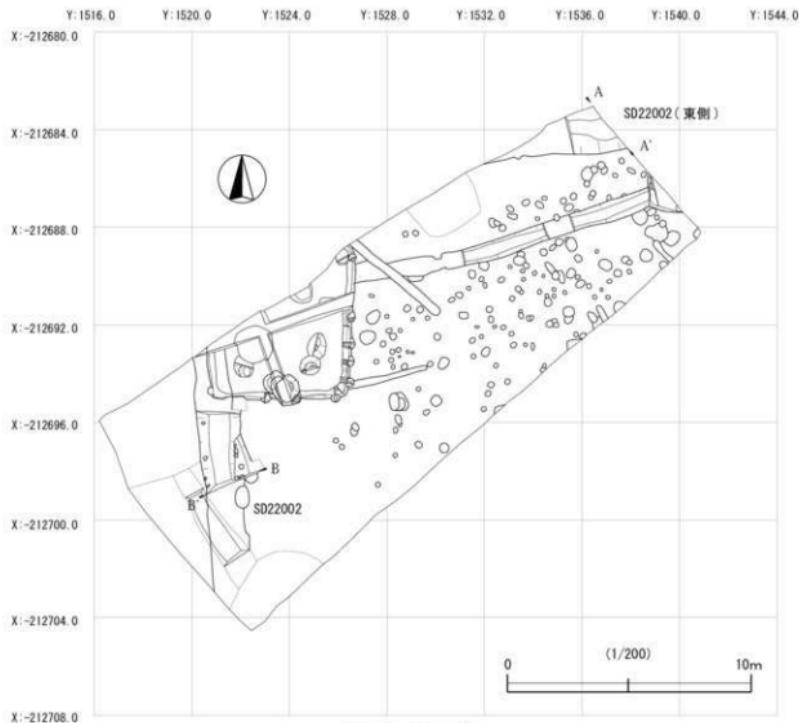
第3表 穴穴建物跡属性表

建物名	平面形	規模 (m) 東西×南北	軸方位	床	カマド	立てこ	構築材	焼道部 (cm)	柱穴	周囲	出土遺物	時期	備考
SD22001	長方形	5.82 X 6.2	N-3-E (新・旧)	貼床	北壁 中央	不明	長煙道 242	主柱穴 2 壁柱穴 10	カマド を除く 全周回	ロクロ成形土師器甕・ 高台壺・甕、須恵器甕・ 壺・蓋・瓶、便・鐵斧	9世紀後半	区画大溝（SD22002） より新 より新 焼道部側壁を粘土 で補強	

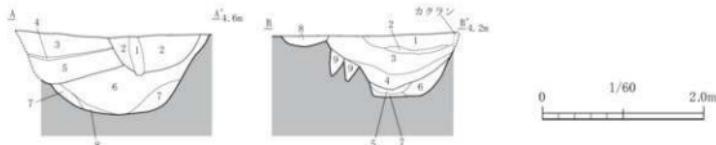
d. 溝

【SD22002・22012】(第20～24図)

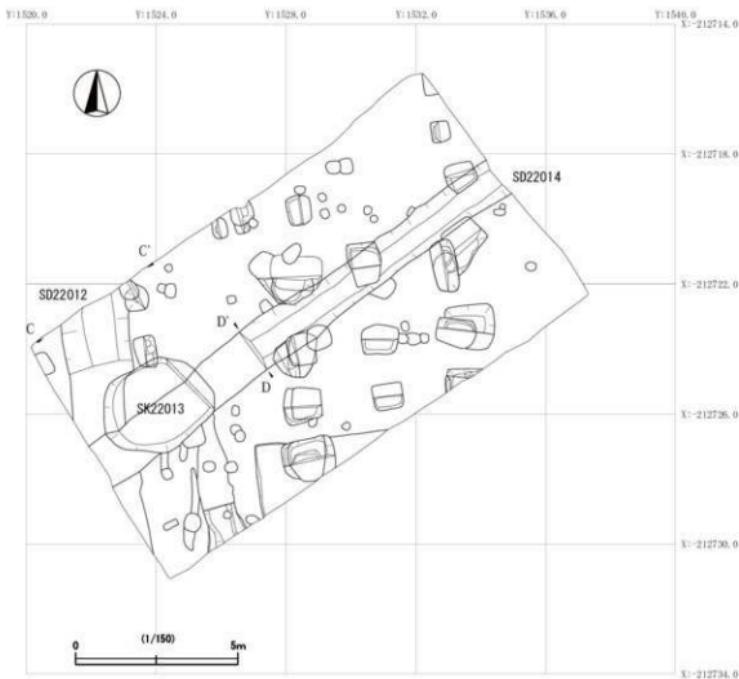
I 区南西部と北東部で SD22002、II 区西部で SD22012 を確認した。SD22002 は、今次調査 I 区に北接する第6次調査 II 区で発見した直角に曲がる L 字状の大溝である SD21002 の南へ



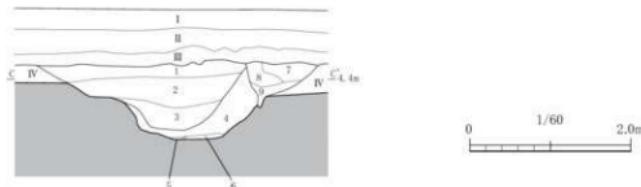
第20図 I区大溝



第21図 I区 SD22002 土層断面図



第22図 II区 大溝・溝跡・近世大型土坑



第23図 II区 SD22012 土層断面図

SD22002 南北セクション（東壁）

No.	土色	土質	備考
1	暗褐色	10VR3/3	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。にぶい黄褐色砂質シルト小ブロック。炭化物粒を微量に含む。
2	暗褐色	10VR3/3	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。にぶい黄褐色砂質シルト小ブロックを多量に含む。処理設施の柱穴跡。
3	暗褐色	10VR3/3	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。下部にぶい黄褐色小ブロックを多量に含む。
4	黒褐色	10VR2/3	シルト しまりやや弱い。粘性弱い。燒土・炭化物を多量に含む。層厚2～3cmの薄層。
5	暗褐色	10VR3/4	シルト しまりやや弱い。粘性やや強い。褐色粘土粒をやや多く含む。
6	黒褐色	7. 10VR3/1	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。下部にぶい黄褐色砂質シルト小ブロックを多量に含む。
7	褐色	10VR4/6	砂質シルト しまりやや弱い。粘性やや強い。堆積色シルトブロックをまだ多く含む。
8	暗褐色	10VR3/4	砂質シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。にぶい黄褐色砂質シルトブロックを少量含む。

SD22002 東西セクション（南壁）

No.	土色	土質	備考
1	暗褐色	10VR3/3	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。褐色粘土小ブロックを少量含む。
2	黒褐色	10VR2/2	粘質シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。燒土ブロック、炭化物を多量に含む。
3	黒褐色	10VR3/2	シルト しまりやや弱い。粘性やや強い。焼土粒を微量に含む。
4	黒褐色	10VR2/3	粘質シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。にぶい黄褐色シルト小ブロックを少量含む。
5	暗褐色	10VR3/3	粘質シルト しまりやや弱い。粘性やや強い。にぶい黄褐色シルト小ブロックを多量に含む。
6	黒褐色	10VR2/2	粘質シルト しまりやや弱い。粘性強い。にぶい黄褐色シルト小ブロックを多量に含む。
7	暗褐色	10VR3/4	砂質シルト しまりやや弱い。粘性強い。
8	暗褐色	10VR3/3	シルト しまりやや弱い。粘性弱い。
9	暗褐色	10VR3/3	砂質シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。にぶい黄褐色シルトブロックを多量に含む。

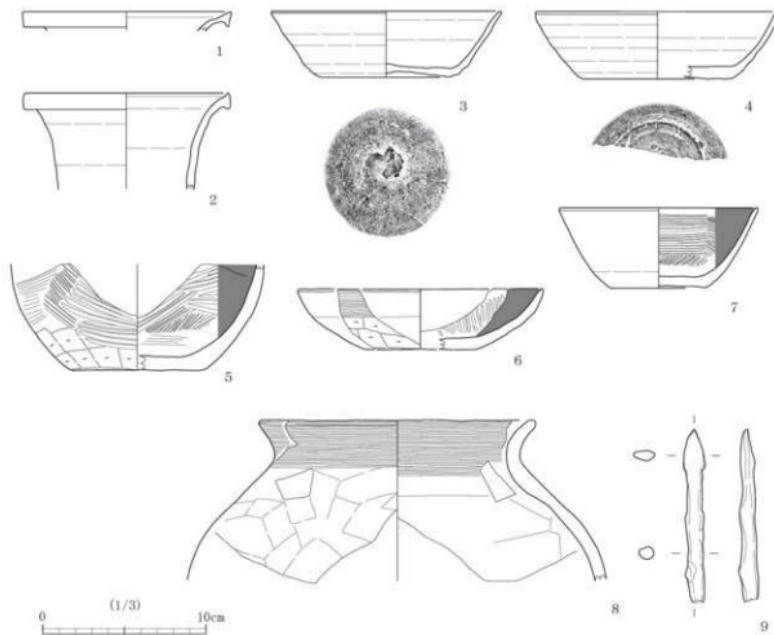
SD22012 北壁 東西セクション

No.	土色	土質	備考
1	暗褐色	10VR3/4	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。褐色粘質シルト粒、炭化物、遺物片を多く含む。
2	暗褐色	10VR3/2	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。にぶい黄褐色シルト小ブロックを少量含む。
3	にぶい黄褐色	10VR3/3	砂質シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。にぶい黄褐色シルト小ブロックを少量含む。
4	黒褐色	10VR3/2	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。無鉄化物を多量に含む。
5	黒褐色	10VR3/2	砂質シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。
6	にぶい黄褐色	10VR4/3	粘質シルト しまりやや弱い。粘性やや強い。
7	暗褐色	10VR3/4	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。遺物片を少量含む。
8	暗褐色	10VR3/3	シルト しまりやや弱い。粘性弱い。遺物片を多量に含む。
9	暗褐色	10VR3/3	砂質シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。遺物片を少量含む。

及び東側の延長部分である。

I 区で確認した SD22002 の検出長は西辺及び北辺とも 6.0m である。主要遺構との重複関係では SI22001 と重複し、これより古い。北辺の溝では北肩が確認できていないが、底面の幅は 60 cm 前後を測る。第 6 次調査と同様に土層観察から古段階の大溝が埋没していく途中で新段階の溝を北側に広げて作り直している。新段階・古段階とも堆積土は 3 層確認でき、すべて自然堆積である。西辺の溝は遺構精査面での上幅 150 cm・下幅 70 cm 前後である。こちらは土層観察ではほぼ同位置で掘り直しが行われている。新段階の堆積土は 4 層、古段階の堆積土は 3 層が確認でき、すべて自然堆積である。I 区で確認した両者とも新段階の覆土の中位付近（第 21 図 SD22002 南北土層断面 4 層・SD22002 東西土層断面 2 層）で焼土・炭化物を含むことを特徴としている。なお、北辺の溝は新段階・古段階の両者とも上・下幅は広いのに対し、西辺の溝では狭くなっている。土層断面図を作成した付近では、杭を打ち込んだとみられる痕跡が溝の東肩で 6 箇所、西肩で 4 箇所確認できており、橋板などを渡すなどして外部と区画内部をつなぐ簡易的な通路が存在していた可能性も考えられる。

遺物は、灰釉陶器長頸瓶、須恵器壺・甕・長頸瓶、土師器壺・甕・鉢、金属製品の鉄鎌が新段階の上層から中層にかけて出土している。第 24 図 1 は猿投窯の灰釉陶器長頸瓶である。付近から出土している K14 号窯式の壺と釉調が近似することから、本資料についても当該期である可能性が高い。3・



SD22002 · 22012 出土遺物観察表

No.	細部・層位	種別	器種	外面	内面	現存	法量(cm)			写真 回数 No.		
							口径	底径	高さ			
1	灰無陶器	長颈瓶	ロクロナダ	灰軸を施釉 直投窓	ロクロナダ	口縁1/8	(12.9)	—	—	12-5	42	
2	灰窓器	長颈瓶	ロクロナダ	窓による自然軸	ロクロナダ	降灰による自然軸	口縁1/4	(10.8)	—	(5.9)	12-8	
3	SD22002 上層	單窓器	环	ロクロナダ 底部ヘラギリ後未調整	ロクロナダ	口縁1/2, 底部完全	14.2	8.0	4.0	12-6	22	
4	SD22002	單窓器	环	ロクロナダ 底部ヘラギリ後未調整	ロクロナダ	口縁1/3, 底部1/3	(15.0)	(9.1)	(4.1)	12-7	26	
5	SD22002 上層	土師器	环	ヘラケズリ後ヘラミガキ 底部未切後ヘラナダ	ヘラミガキ	黑色處理	底邊3/4	—	8.0	(6.5)	13-4	28
6	SD22012	土師器	环	ロコナダ・ヘラケズリ	ヘラミガキ	黑色處理	口縁1/8, 底部1/5	(16.8)	—	(7.2)	13-2	47
7	SD22002 東側上層	土師器	环	ロクロナダ 底部未切後ヘラケズリ	ヘラミガキ	黑色處理	口縁1/2, 底部完全	12.4	6.0	4.9	13-3	29
8	SD22002	土師器	環	ロコナダ・ヘラケズリ 磨滅跡有	ロコナダ・ヘラナダ	器表 が剥離	口縁1/4, 底部欠損	(17.0)	—	(9.0)	13-5	49
9	SD22002	金属製品	鉄鏡	重量: 17 g		ほぼ完存	(10.6)	1.4	0.9	13-6	48	

第24図 SD22002 · 22012 出土遺物



第25図 大溝区合成図

4の須恵器壺は両者ともに底部はヘラギリで未調整である。5の土師器鉢はロクロ成形であり、内外面ともにミガキが施される。底部は磨滅しており判然としないが、回転糸切のちナデ調整が行われている。7の土師器壺もロクロ成形であり、底部は回転糸切のちヘラケズリによる調整がなされる。8の土師器甕は非ロクロ成形で、胴部ではヘラケズリがなされている。9の鐵鐵は錆の固着が著しいが、長三角形に分類（津野 2011）されるものである。

II区で確認したSD22002は、I区のSD22002の南側延長部分と考えられる。主要遺構との重複関係ではSK22013、SD22014と重複し、これより古い。検出長は6.0mである。遺構精査面での上幅200cm・下幅90cm前後である。西辺のSD22002と同様に古段階の大溝が埋没していく途中で新段階の溝をやや西側へ掘り直している。新段階・古段階とも堆積土は3層確認でき、すべて自然堆積である。なお、SD22012では新段階最上層の1層でやや多くの焼土・炭化物が層全体に含まれているが、I区SD22002のような明確な焼土・炭化物を含む層序はみられない。

遺物は、須恵器壺・甕・長頸瓶、土師器壺・甕が出土している。第24図2の須恵器長頸瓶では口縁部から頭部の内外で降灰による自然釉の付着がみられる。6の土師器壺は非ロクロ成形である。

第4表 溝跡属性表

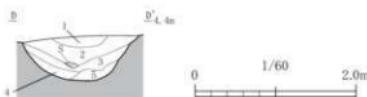
遺構名	検出長 (m)	断面形	埋積 (cm)			方向	堆積土	出土遺物	備考
			上幅	下幅	深さ				
SD22002 北辺 6.00 西辺 11.28	北辺はU字 西辺は逆台形	西辺 180	西辺 83	西辺 78	西辺 N-6-E	自然堆積	灰釉陶器長頸瓶、非ロクロ土師器壺・甕、ロクロ成形土師器壺・甕、須恵器壺・蓋・甕、鉄鐵	SI2201より旧 非西辺の検出長は、第6次 堆積、須恵器壺・蓋・甕、鉄鐵	II区検出分も含む
SD22012 8.20	逆台形	204	96	60	N-6-E	自然堆積	非ロクロ成形土師器壺・甕、ロクロ成形土師器壺・甕、須恵器壺・蓋	SK22013・SD22014より旧 甕	SK22013・SD22014より旧 甕
SD22014 15.00	U字状	140	56	55	N-6-E	下位は自然堆積 上位は人為埋土	須恵器壺・蓋、瀬戸美濃窯陶器、石臼	SK22013より旧 SI22011・18・19、SD22012 より新	

※深さは遺構確認面から

e. その他の遺構と出土遺物

【SD22014】(第22・26・27図)

II区中央に位置する東西溝で、古代遺構の上部を覆う基本土層第III層を掘り込む遺構である。SK22011・22019、SK22013、SD22012と重複関係にあり、SK22013を除くいずれよりも新しい。本遺構の東側、及び西側は調査区外へさらに延びるが、調査区内での総検出長は15.00mで、主軸方位は真



第26図 SD22014 土層断面図

SD22014 南北セクション

No.	土色	土質	備考
1	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。酸化鉄を多量に含む。
2	暗褐色	10YR3/4	シルト しまりやや弱い。粘性やや弱い。明褐色シルト小ブロックを少量含む。最下部に掌大的礫を少量含む。
3	暗褐色	10YR3/3	砂質シルト しまり弱い。粘性やや弱い。
4	暗褐色	10YR3/2	砂質シルト しまり弱い。粘性弱い。にぶい黄褐色小ブロックを少量含む。
5	暗褐色	10YR3/3	シルト しまり弱い。粘性やや弱い。酸化鉄を多量に含む。

北から 54° 東へ傾く。上幅 140 cm 前後、底面幅は 50 cm 前後であり、断面形状は逆台形である。底面は比較的平坦であるが、緩やかに西側へ傾斜している。堆積土は 5 層に分層でき、1・2 層は人為堆積、3～5 層は自然堆積である。

遺物は須恵器坏・甕・蓋（第 27 図 1）、土師器坏・甕、石製品の石臼などが出土している。

【SK22013（近世大型土坑】（第 22・27 図）

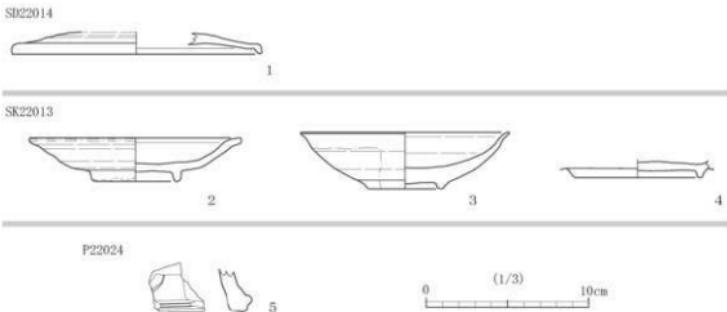
II 区西側に位置する。古代遺構の上部を覆う基本土層第Ⅲ層を掘り込む遺構である。SD22012・22014 と重複関係にあり、いずれよりも新しい。平面形状は梢円形で、規模は長軸 342 cm、短軸 265 cm を測る。断面形状は皿形であり、遺構精査面からの深さは 20 cm を測るが、本来の掘り込み面はこれより遺構精査面より 50 cm ほど高い。堆積土は 1 層で人為堆積である。

遺物は、須恵器坏、土師器坏・甕、近世陶器が出土している。第 27 図 2 は内底面に蛇の目釉ハギが行われている瀬戸美濃産の皿、3 の唐津産皿は口唇部が打ち欠かれている。4 の肥前系陶器の皿では内底面に 5 か所の胎子目痕が認められる。

【P 22024】（第 7・27 図）

II 区北側中央に位置する。一部が調査区外へ延びるが平面形は隅丸長方形を呈するとみられ、長軸 54 cm、短軸 46 cm を測る。堆積土は 1 層で人為的埋土である。柱痕跡は確認されていない。

遺物は、堆積土中から第 27 図 4 の須恵器円面鏡が出土している。なお、遺構精査時にも同一個体資料（第 28 図 8）が出土しているが、接合関係は認められない。



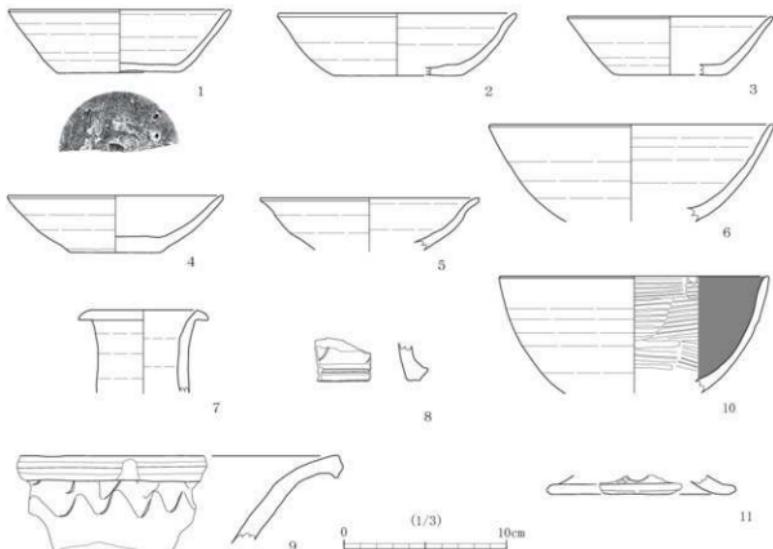
その他の遺構出土遺物観察表

No.	細部・層位	種別	器種	外面	内面	現存	法量 (cm)			写真 図版 No.
							口径	底径	深さ	
1	SD22014	須恵器	蓋	ロクロナデ	ロクロナデ	1/8	(15.6)	-	(1.4)	38
2	SK22013	土師陶器	皿	高台剥付 天目釉 高台剥付及び高台内には施釉なし 瀬戸美濃産	内底面に蛇の目釉ハギ 天目釉	ほぼ完存	13.2	5.5	2.7	32
3	SK22013	土師陶器	皿	高台削り出し 灰釉 唐津産	灰釉	ほぼ完存	13.0	5.7	3.4	33
4	SK22013	土師陶器	皿	高台削り出し 高台内まで灰釉を施す 肥前系陶器	灰釉 内底面に 5 か所の 新土目痕	灰釉完存	-	8.0	(1.1)	35
5	P22024	須恵器	円面鏡	ロクロナデ一部に単刃工具による波状?	ロクロナデ	小片	-	-	-	36

第 27 図 その他の遺構出土遺物

f. 遺構外出土遺物

第7次調査では、重機による表土掘削や包含層の掘り下げ、精査時などの遺構外の出土量は少ない。図示した遺物以外では、灰釉陶器長頸瓶、須恵器壺・甕、土師器壺・甕が少量出土している。



遺構外出土遺物観察表

No.	細部・層位	種別	器種	外面	内面	残存	法線(cm)			厚真	壁厚
							口径	底径	部高		
1	II区削削時	須恵器	壺	ロクロナデ 底部へラギリ後ヘラケズリ	ロクロナデ	口縁1/2、 底部1/2	13.8	7.6	3.9	14.1	24
2	II区削削時	須恵器	壺	ロクロナデ 底部未切後ヘラケズリ	ロクロナデ	口縁1/6、 底部1/8	(14.9)	(7.6)	3.8	14.3	31
3	II区南側 精査	須恵器	壺	ロクロナデ 底部削削未切後未調査	ロクロナデ	口縁1/3、 底部1/2	(12.8)	(6.0)	(3.6)	14.2	25
4	II区南側 精査	須恵器	壺	体部下半ヘラケズリ後ロクロナデ 底部ヘラギリ後ヘラケズリ	ロクロナデ	口縁1/5、 底部充存	(13.4)	5.5	3.5	13.8	23
5	II区削削時	須恵器	壺	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁1/6	(13.6)	—	(3.3)	—	39
6	II区削削時	須恵器	壺	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁1/5	(17.8)	—	(6.6)	14.4	37
7	II区精査	須恵器	長頸瓶	ロクロナデ 口部に薄灰による自然釉 大戸窓か	ロクロナデ 斜部内面に 降灰による自然釉	口縁1/4	(8.0)	—	(5.1)	14.6	40
8	II区削削時	須恵器	円腹甕	ロクロナデ 一部に串状工具による波状文?	ロクロナデ	小片	—	—	—	14.7	44
9	I区精査	須恵器	甕	口縁帶下に波状文 ロクロナデ	ロクロナデ 降灰による 自然釉	—	—	—	—	14.5	34
10	II区南側 精査	土師器	壺	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁1/4	(16.8)	—	(7.2)	14.8	43
11	I区精査	土師器	器台	ヘラミガキ・ヨコナデ 一部に円形の透孔	ヘラケズリ・ヨコナデ	周部1/8	(11.8)	—	—	—	45

第28図 遺構外出土遺物

第IV章 考 察

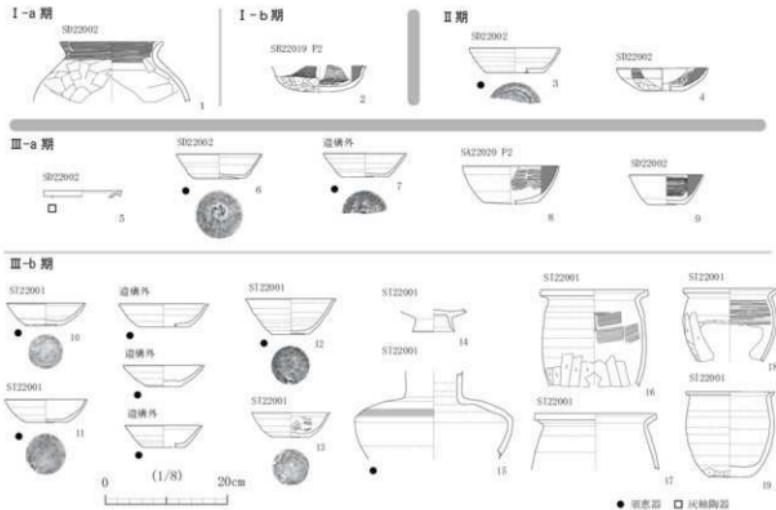
1. 遺物について（第36図）

原遺跡ではこれまでの調査により、発見遺構の重複関係と出土遺物の年代観からI～III期の各期を設定し、またI期については6世紀前半～後半にかけての時期をI-a期（以下、I-a期と記載。また後続する各小期についても同様に記述する）、6世紀末～7世紀前半をI-b期、7世紀後半～8世紀初頭をI-c期、II期については8世紀前半をII-a期、8世紀中頃～後半をII-b期、そしてIII期は8世紀末～9世紀前半をIII-a期、9世紀中頃以降をIII-b期としている。以下に今回の調査で出土した遺物について、村田晃一氏による編年（村田1994・2007）に拠りながら、特徴的な資料を中心に概要を述べる。

I期に比される資料で図化したものは1・2であるが、出土資料全体を見渡しても少ない傾向である。1の壺は丸味のある胴部で、口縁も短く外反し、頸部に段が見られないことからI-a期に、2の土師器環は口唇部を欠くが有段丸底で、口縁もやや強く外反することからI-b期に位置付けた。

II期の資料については、これまで実施してきた原遺跡の調査で出土量が少なく、今回の調査でも同様の傾向となった。3の須恵器環は口径・底径とも比較的大きく、底部から口縁部へ直線的に開く。4の土師器環は非ロクロ成形であるが、ヘラケズリにより平滑に仕上げている。

第7次調査出土資料の主体となるIII期の資料であるが、出土遺構はほぼSD22001とSD22002・22012上層に限られる。土師器はすべてロクロ成形であり、須恵器環では底部の小型化が進み、特にIII-b期では口縁部が外反するもの（12・15）や内湾気味に立ち上がるもの（11）がみられる。



第29図 第7次調査出土の主要な土器

2. 遺構について

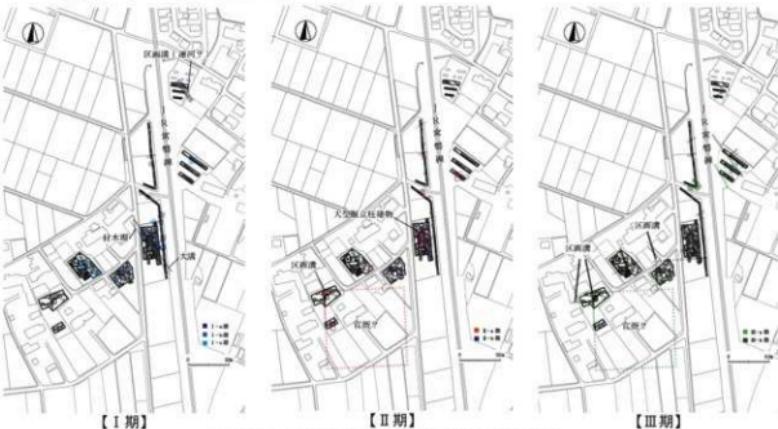
a. 大溝による区画について

第6次調査で確認された大溝（SD21002）については、平面形状では直角に曲がることを確認し、また真北方位を強く意識してつくられていることから何らかの施設を取り囲む可能性が高いものであることを指摘した。また新段階の大溝の上層から9世紀前半段階の遺物が出土することから、その時期には埋没が進んでいたことが判明し、古段階の大溝の開削時期については8世紀代の可能性が高いことを推量した（岩沼市教委2022）。

前述のように第7次調査はこの大溝の概要をさらに把握することを調査目的として実施し、その結果としてまず区画西辺を構成する溝（以下、西辺溝と記述）が北西コーナー部分から45m以上南へ延びていることを確認した。さらにI区の調査成果から区画北西隅では大溝の機能時期とする8世紀代の遺構・遺物が極めて希薄であることを確認し、区画外部への出入口とみられる箇所はあるものの、概ね空閑地となっていたことが判明した。一方、南側に設定したII区では、西辺溝に沿う形でSB22011・22019をはじめとする掘立柱建物が存在することが明らかとなった。発見したこれら建物の性格についての検討は区画範囲や区画内部の様相がさらに明らかとなった段階で改めての検討が必要となるが、区画内部には官衙的な機能を有する施設が存在する蓋然性は、より高まったと言える。

しかしながら、第6・7次調査で確認した区画が方形であると仮定して遺跡全体に目を転じた場合、第3～5次調査で発見した8世紀代に機能していたとみられる建物群はすべて本区画外に位置することになる。このことから遺跡内では8世紀段階において、機能を分離する複数の官衙施設が併存していた可能性を検討する必要がある。

また、第6次調査では区画溝の外側、第7次調査では区画溝の内側において堀や築堤といった遮蔽施設の有無確認を念頭に置いて調査を行ったが、いずれの調査でも明確な痕跡はうかがえなかった。このため、遺跡内に存在した可能性が高い複数の官衙施設全体を取り囲む大規模な外縁施設の有無についても留意しながら調査を行う必要がある。



第30図 原遺跡内で発見された主要造構と区画溝

b. 堀立柱建物跡

第7次調査では、II区において建て替えを含めると4棟の堀立柱建物跡が発見されている。残念ながら調査区内において建物の全容が明らかとなったものは無いが、ここではSB22019と、建て替え後の建物であるSB22011について見ていきたい。

SB22019は桁行3間以上、梁行2間の南北棟である。建物の特徴としてはコーナー部分の柱穴が建物に対して斜めに掘られていること、そして建物の中央に床束とみられる柱穴がみられることである。P5・P6と桁側柱穴との距離間は、SB22019では比較的均等であるのに対し、SB22011の桁側柱穴との距離間はやや大きな齟齬が生じることから、P5・P6についてはSB22019に伴う可能性が高いと考えている。各柱間の距離は桁側で230～180cm、梁側で280・230cmとなる。桁側では北側のP1-P2間と、柱痕跡は見当たらなかったがP7-P8間が、他の柱穴とはやや大きく離れている。梁側ではP1-P2間が狭く、P2-P7間がやや広い。これは床束とみられるP5・P6でも同様の傾向となっている。建物の性格については区画の全容が明らかになってきた段階で詳細な検討が必要となるが、確認できた柱痕跡が大きく、また床束を伴うものであることから本建物については高床倉庫や櫓などの可能性が指摘されている（註1）。

SB22019の建て替えとみられるSB22011も桁行3間以上、梁行2間の南北棟である。なお、SB22011の廃絶時にはP1・P7・P8で柱抜取が行われている。建物の柱穴はSB22019の柱抜き取りを兼ねているが、全体的に西へ32cm前後移動している。ただし、北側の柱通りについてはほぼSB22019のラインと重なっており、区画内部の空間利用に制約あるいは高い計画性が存在していた可能性をうかがわせる。前述のとおりSB22011は、SB22019の柱抜き取りを兼ねて建てられていることから、各柱間の距離もほぼ同様の傾向を示す。ただし、SB22011では建物中央で柱穴が伴っておらず、SB22019とは異なる形態の建物であった可能性も残り、今後区画内部の景観変遷を考える上での検討事項の一つとなる。

c. 穫穴建物跡

第7次調査ではI区で1棟、II区で1棟の計2棟の竪穴建物を確認した。第6次調査II区のSI21003を含めると3棟となるが、これまで調査を行ってきた成果に照らし合わせると、竪穴建物の分布は遺跡西側へ向かうにつれて希薄となっていく状況がうかがえる。

調査を実施したSI22001は、西辺溝が完全に埋没した後の9世紀後半に機能していたとみられるが、建物規模は遺跡内の同時期の事例と比べると大型である。また壁際には壁柱穴が巡り、炉跡とみられる焼土遺構が存在する点も踏まえれば、工房的な役割を担っていた可能性が考慮される。なお、調査した範囲では建物自体の規模拡張は行われておらず、床の貼り増しによって新旧2時期の利用をしていたことが確認されている。しかしながら、焼土遺構の土層観察では周溝の埋土が焼土遺構を切っていたことから、床の貼り増しを行う際に壁板などについても改修が行われていた可能性がある。なお、詳細な調査はできなかったが、第6次調査で確認した煙道部分は補強として粘土が貼り付けられていた可能性があり、本遺跡では普遍的にみられない壁柱穴が伴う建物であることを併せ考えると、SI22001は他所からの人の移動に伴つてつくられた可能性も考慮する必要があろう。

註1 2022年11月2日に来跡された大橋泰夫氏によるご教示

第V章 総 括

1. 原遺跡は宮城県中央部南寄りの岩沼市南長谷字原・中原・上原・北上・角方地内に所在する。遺跡は南側を東流する阿武隈川によって形成された自然堤防上に立地している。
2. 今回の発掘調査は重要遺跡の範囲・内容確認調査として実施した。調査区は第6次調査II区の南側であり、発掘調査面積は392 m²（I区255 m²、II区137 m²）である。
3. 遺跡が所在する地域は、古代においては東山道と、茨城県から福島県・宮城県南部の太平洋側に設置された「海道」の合流・分岐地であることから、これまでに発見された官衙関連の遺構・遺物は『延喜式』に記載される玉前駅家、あるいは多賀城跡から出土した木簡によって存在が明らかとなった玉前刻に関わるものとみられる。
4. 確認した遺構は古代の掘立柱建物跡4棟、竪穴建物跡2棟、近世大型土坑1基、古代の区画大溝を含む溝跡4条、土坑・柱穴多数である。
5. 区画大溝（SD22002・22012）は8世紀代に開削された可能性が高いものであるが、本調査でも2時期の変遷を確認した。また廃絶時期についてもSI22001の存在から9世紀後半以前には完全に埋没していたことが明らかとなった。
6. 大溝は第6次調査II区で発見した区画の北西コーナーから西辺が45m以上延伸することを確認した。またI区の調査では北西部の一部で区画の内外を結ぶ出入口の可能性がある痕跡は認められたものの、区画内部の施設が機能していた時期には空閑地であったことが判明した。
7. II区で発見された掘立柱建物跡は、いずれも真北あるいは西辺溝を強く意識した主軸方位でつくられていた。また同位置で、同規模の建物の建替え（SB22019・22011）も認められており、区画内部の空間利用には制約あるいは高い計画性が存在していた可能性がある。
8. 9世紀後半の機能時期が考えられるSI22001は、区画大溝が完全に埋没したのちにつくられたものである。本遺跡内で確認された当該時期の竪穴建物としては最大の規模となる。また壁柱穴の存在や、詳細調査は実施していないが煙道部を粘土で補強するなど、従来本遺跡内でみられる当該時期の竪穴建物とは異なる様相を呈している。
9. SI22001では新旧2時期の床面が確認された。旧段階の床面では炉跡とみられる焼土遺構が存在し、これを埋めたのちに新たに床の貼り増しを行っていたことが明らかとなった。

【引用・参考文献】

- 愛知県史編さん委員会 2007 『愛知県史 別編 畜業2 中世・近世 漢戸系』
- 愛知県史編さん委員会 2015 『愛知県史 別編 畜業1 古代 猿投系』
- 会津若松市 2000 『会津若松市史14 文化編1 陶器類 会津のやきもの〔須恵器から陶磁器まで〕』
- 今泉隆雄 2018 「第二部第五章 古代南奥の地域的性格」『古代国家の地方支配と東北』吉川弘文館
- 岩沼市 1992 『岩沼市土地分類調査(細部調査)報告書・現況調査編』
- 岩沼市教育委員会 2017a 『貞山塚発掘調査報告書』岩沼市文化財調査報告書第17集
- 岩沼市教育委員会 2018a 『原遺跡第2次調査概要報告書』岩沼市文化財調査報告書第19集
- 岩沼市教育委員会 2018b 『下野郡館跡』岩沼市文化財調査報告書第20集
- 岩沼市教育委員会 2019a 『原遺跡第3次調査概要報告書』岩沼市文化財調査報告書第21集
- 岩沼市教育委員会 2019b 『市内遺跡発掘調査報告書1』岩沼市文化財調査報告書第22集
- 岩沼市教育委員会 2019c 『熊野遺跡第1・2次調査報告書』岩沼市文化財調査報告書第23集
- 岩沼市教育委員会 2020a 『原遺跡第4次調査概要報告書』岩沼市文化財調査報告書第24集
- 岩沼市教育委員会 2020b 『市内遺跡発掘調査報告書2』岩沼市文化財調査報告書第25集
- 岩沼市教育委員会 2021a 『原遺跡第1次調査ほか』岩沼市文化財調査報告書第26集
- 岩沼市教育委員会 2021b 『原遺跡第5次調査概要報告書』岩沼市文化財調査報告書第27集
- 岩沼市教育委員会 2021c 『市内遺跡発掘調査報告書3』岩沼市文化財調査報告書第28集
- 岩沼市教育委員会 2022 『原遺跡第6次調査概要報告書』岩沼市文化財調査報告書第29集
- 岩沼市史編纂委員会 2015 『岩沼市史』第4巻 資料編I 考古
- 岩沼市史編纂委員会 2018 『岩沼市史』第1巻 通史編I 原始・古代・中世
- 近江俊秀 2006 『古代国家と道路 考古学からの検証』青木書店
- 川又隆央 2021 「原遺跡(宮城県岩沼市)の調査」『古代交通研究会第21回大会』資料集
- 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年』資料集
- 白島良一 2015 「特論1 岩沼市内の東山道と玉前駅・刻(関)」『岩沼市史 第4巻 資料編I 考古』
- 白島良一 2018 「第八章 四 東山道・東海道駿駅と岩沼」『岩沼市史 第1巻 通史編I 原始・古代・中世』
- 仙台市教育委員会 2004 『郡山道路24』仙台市文化財調査報告書第269集
- 館野和己 1998 『日本古代の交通と社会』鳩書房
- 館野和己・出田和久編 2016 『日本古代の交通・交流・情報』1~3 吉川弘文館
- 辻 秀人編 2007 『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部
- 津野 仁 2011 『日本古代の武器・武具と軍事』吉川弘文館
- 東北古代土器研究会 2005 『研究報告2 東北古代土器集成—古墳後期～奈良・集落編(陸奥)ー』
- 東北古代土器研究会 2008 『研究報告3 東北古代土器集成—須恵器・窯跡編(陸奥)ー』
- 水田英明 2015 「古代東北の内陸水系 -最上川・阿武隈川流域を中心に-」『日本古代の運河と水上交通』八木書店
- 水田英明 2018 「第八章 三 玉前駅・玉前駅と阿武隈川」『岩沼市史 第1巻 通史編I 原始・古代・中世』
- 古川一明 2018 「東北・開拓地での古代の大型土坑について」『東北歴史博物館紀要19』東北歴史博物館
- 宮城県教育委員会 1994 『山王遺跡八幡地区の調査』宮城県文化財調査報告書第162集
- 宮城県教育委員会 1996 『山王遺跡III』宮城県文化財調査報告書第170集
- 宮城県教育委員会 1996 『山王遺跡IV』宮城県文化財調査報告書第171集
- 宮城県教育委員会 1997 『山王遺跡V-第1分冊(八幡地区)-』宮城県文化財調査報告書第174集
- 宮城県教育委員会 2018 『山王遺跡VI』宮城県文化財調査報告書第246集
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1985 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1984 多賀城跡』
- 宮城県多賀城跡調査研究所 2013 『多賀城跡木簡 II』宮城県多賀城跡調査研究所資料II
- 宮城県多賀城跡調査研究所 2020 『多賀城施釉陶磁器』宮城県多賀城跡調査研究所資料V
- 村田晃一 1994 「土器からみた官衙の終末-東北地方の場合-」『古代官衙の終末をめぐる諸問題 第1分冊問題提起・各地方の概要』東日本埋蔵文化財研究会
- 村田晃一 2005 「7世紀における陸奥北辺の様相-宮城県域を中心として-」『日本考古学協会 2005年度福島大会シンポジウム資料集』日本考古学協会 2005年度福島大会実行委員会
- 村田晃一 2007 「V. 宮城県中部から南部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』
- 東北学院大学文学部



1 調査地周辺上空から北東側をのぞむ



2 調査地周辺上空より南側をのぞむ

写真図版2



1 調査地周辺上空より西側をのぞむ



2 I・II区空撮（真上から）



1 I・II区空撮（南西から）



2 I区空撮（真上から）

写真図版4



1 I区空撮（東から）



2 SI22001 全景（南から）

写真図版5



1 SI22001 全景（東から）



2 SI22001 と SD22002 の重複状況（北から）



3 SI22001 P1 土層断面（北から）



4 SI22001 P2 土層断面（南から）



5 SI22001 炉跡（西から）



6 SI22001 壁柱穴 1（南から）



7 SI22001 壁柱穴 2（北西から）



8 SI22001 壁柱穴 3（北東から）

写真図版6



1 SD22002 南側土層断面（北から）



2 SD22002 東側土層断面（西から）



1 SD22002 遺物出土状況 1 (北から)



2 SD22002 遺物出土状況 2 (西から)



3 SD22002 遺物出土状況 4 (南から)



4 SD22002 遺物出土状況 3 (東から)



5 II区空撮 (南西から)

写真図版8



1 II区空撮（東から）



2 SB22011・20119 掘出状況（北から）



1 SB22011 P1 土層断面（東から）



2 SB22011・19 P2 土層断面（北から）



3 SB22019 P2 遺物出土状況（北から）



4 SB22019 P6 土層断面（南から）



5 SB22011・19 P9 土層断面（南から）



6 SB22011・19 P10 土層断面（北から）



7 SB22022 P2 土層断面（東から）



8 SA22020 P2 土層断面（東から）

写真図版 10



1 土師器・坏 (第 10 図 2)



2 土師器・坏 (第 14 図 1)



3 須恵器・坏 (第 18 図 1)



4 須恵器・坏 (第 18 図 2)



5 土師器・坏 (第 18 図 5)



6 土師器・坏



7 赤焼土器・坏 (第 18 図 9)



8 土師器・壺 (第 19 図 16)



1 須恵器・坏（第18図3）



2 須恵器・蓋（第18図8）



3 須恵器・坏（第18図4）



4 須恵器・長頸瓶（第18図10）



5 土師器・高台坏（第18図7）



6 土師器・壺（第19図12）



7 土師器・壺（第19図11）



8 土師器・壺（第19図14）

写真図版 12



1 土師器・甕（第 19 図 15）



2 土師器・甕（第 19 図 13）



3 土師器・甕（第 19 図 17）



4 金属製品・鉄斧（第 19 図 19）



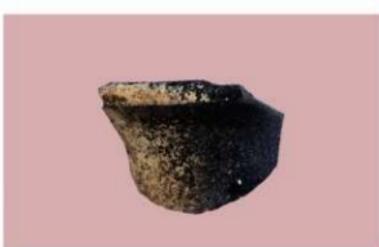
5 灰釉陶器・長頸瓶（第 24 図 1）



6 須恵器・壺（第 24 図 3）



7 須恵器・壺（第 24 図 4）



8 須恵器・長頸瓶（第 24 図 2）



1 須恵器・長頸瓶（猿投塚）



2 土師器・壺（第 24 図 6）



3 土師器・壺（第 24 図 7）



4 土師器・鉢（第 24 図 5）



5 土師器・甕（第 24 図 8）



6 金属製品・鐵旗（第 24 図 9）



7 須恵器・円面鏡（第 27 図 5）



8 須恵器・壺（第 28 図 4）

写真図版 14



1 須恵器・坏（第28図1）



2 須恵器・坏（第28図3）



3 須恵器・坏（第28図2）



4 須恵器・坏（第28図6）



5 須恵器・壺（第28図9）



6 須恵器・長頸瓶（第28図7）



7 須恵器・円面鏡（第28図8）



8 土師器・坏（第28図10）

ふりがな	はらいせきだいななじちょうさがいようほくしょ						
書名	原遺跡第7次調査概要報告書						
シリーズ名	岩沼市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第30集						
編集者名	川又隆央・熊谷篤・黒岩凌太						
編集機関	岩沼市教育委員会						
所在地	〒 989-2480 宮城県岩沼市桜1丁目6-20 TEL(0223)-23-0844						
発行年月日	西暦 2023年3月31日						
所取遺跡	所在地	コード 市町村 道路番号	北緯 ○.○'○"	東経 ○.○'○"	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
原遺跡	岩沼市南長谷字北上	42111 15053	38.05.02	140.51.03	2022.08.04 ～ 2022.12.09	392 m ²	範囲・内容 確認調査
所取遺跡	種別	主な時代	主な構造	主な遺物	特記事項		
原遺跡	官衙関連施設 集落跡	古墳時代 奈良・平安時代	掘立柱建物跡 柱列跡 堅穴建物跡 溝跡 大型土坑 土坑	灰軸陶器 須恵器 土師器 金屬製品 石製品	第6次調査で確認した区画大溝の延長と、区画内部の様相把握を目的として実施。区画西辺の溝は、北西コーナーから南へ45 m以上延伸することを確認。また区画内部には掘立柱建物群が存在することも判明。		
<p>原遺跡が所在する岩沼市南西部の玉崎地区は、『延喜式』に記載される「玉前駅家」、多賀城跡出土木簡にみられる「玉前刻」の比定地とされてきた。平成28年度の圃場整備事業に伴う第1次調査では、掘方規模の大きい柱穴跡、美濃地方で生産されたと考えられる須恵器円面鏡が発見され、また翌29年度に実施した第2次調査では墨書き土器や材木痕が発見されたことから、官衙関連施設の可能性が考えられるようになった。さらに平成30年度に実施した第3次調査では、主軸が真北方向となる桁行10間、梁行3間の長倉が同位置で建て替えが行われていることが判明し、建物の機能した時期は8世紀前半から後半と考えられるなどの成果が得られ、第4次調査では8世紀代～9世紀代の掘立柱建物跡を確認し、官衙中枢施設が移動している可能性が考えられるようになった。一方、第5次調査では、第3次調査で発見された長倉と一連の施設と考えられる掘立柱建物跡や9世紀代の区画溝を確認し、官衙中枢施設の広がりや中枢施設移動後の土地利用の在り方が明らかになった。</p> <p>第7次調査で確認した遺構は古代の掘立柱建物跡4棟、堅穴建物跡2棟、近世大型土坑1基、古代の区画大溝を含む溝跡4条、土坑・柱穴多数である。</p> <p>区画大溝（SD22002・22012）は8世紀代に開削された可能性が高いものであるが、本調査でも2時期の変遷を確認した。また廃絶時期についてもS122001の存在から9世紀後半以前には完全に埋没していたことが明らかとなった。さらに大溝は第6次調査II区で発見した区画の北西コーナーから西辺が45 m以上延伸することを確認した。このほかI区の調査では北西部の一帯で区画の内外を結ぶ出入口の可能性がある痕跡は認められたものの、区画内部の施設が機能していた時期には空閑地であったことが判明した。</p> <p>II区で発見された掘立柱建物跡は、いずれも真北あるいは西辺溝を強く意識した主軸方位でつくられていた。また同位置で、同規模の建物の建設（SB2019・22011）も認められており、区画内部の空間利用には制約あるいは高い計画性が存在していた可能性が考えられる。</p> <p>9世紀後半の機能時期が考えられるS122001は、区画大溝が完全に埋没したのちにつくられたものである。本遺跡内で確認された当該時期の堅穴建物としては最大の規模となる。また堅穴穴の存在や、詳細調査は実施していないが煙道部を粘土で補強するなど、從来本遺跡内でみられる当該時期の堅穴建物とは異なる様相を呈している。S122001では新旧2時期の床面が確認された。旧段階の床面では炉跡とみられる焼土敷構が存在し、これを埋めたのちに新たに床の貼り増しを行っていたことが明らかとなった。</p>							

岩沼市文化財調査報告書第30集
原遺跡第7次発掘調査概要報告書

令和5年（2023）3月
発行 岩沼市教育委員会

岩沼市桜1丁目6番20号
生涯学習課 TEL0223(23)0844

印刷 株式会社クニイ&コミュニケーションズ
岩沼市藤浪一丁目4番35号
TEL0223(22)2221